

ならばあなたのいふ言をきくかも知れません。ピケットで養つてやつたら、陛下の犬になら、少しは有力になれるでせう。あなたは――

(笑ひながら退場。イクタリオン不愉快な顔を両手に抑へて坐る)

(ルデブラスとハアバガス再び入場)

ルデブラス。サアミヤさんは君と談してゐたのか？

イクタリオン。ほんの少し口をきいた。(ルデブラスとハアバガス溜息する) 我々はどうしてもテックを離れなければならん。どうしてもテックから出掛けなければならん。

ルデブラス。何？ 陛下のお供しないですか？

ハアバガス。うん

イクタリオン。もし我々だけで歸れば、バアバル・エル・シヤナツクの奴らが、我々に鞭うたれる筈の奴らが、あれも一度は宮中にゐたことのある奴らだと云つ

て、我々の顔に唾するだらう。

ルデブラス。誰が陛下に命令することが出来る？

ハアバガス。それは神々でなければ。

ルデブラス。神々か？ 今の世に神々はない。我々の世が開けてからもう三千年も立つ。我々の幼時を育て、くれた神々は死んでしまつた。それともあるひは、もつと年の若い國を育てに行つたのかも知れぬ。

イクタリオン。俺は斷じていやだ――おや、衛兵は行つてしまつたか。まづた、神々は役に立たぬ、神々は國家が老朽になると共に何處かへ追ひ拂はれてしまつたのだ。

ハアバガス。しかし此處では我々は老朽になつたわけではない。バアバル・エル・シヤナツクとは時代が違ふ。テックの市はまだ未開だ。

イクタリオン。しかし誰も彼もみんなバアバル・エル・シヤナツクに住つてゐる。

ハアバガス。神々は――

レデブラス。あの老豫言者がやつて来る。

ハアバガス。あの男だつて君や僕ぐらゐの程度で神々を信じてゐるのだ。

デルブラス。さうだ、しかしそれを知つてるやうな顔をしてあの男と談をしてはいけない。

(豫言者舞臺を横切り歩いて行く)

イクタリオン

ルデブラス

ハアバガス

(立上がる) 神々はめぐみ深い。

豫言者。神々は慈愛深くいらせられる。(退場)

イクタリオン。斯うしよう！ あの男に陛下の前で豫言をさせよう。神々が此市を滅したまふからと云つて、陛下が此處をお立ちになるやうにして貰はう。

ルデブラス。あの男がやつてくれるだらうか？

イクタリオン。たぶんあの男にさうやらせることが出来ると思ふ。

ハアバガス。陛下は我々より最つと上手うまに開けていらつしやるからな、神々のことなんぞお構ひなさるまい。

イクタリオン。しかし陛下も神々を無視なさるわけには行くまい。神々が陛下の御先祖を御位に即けたのだ、もし神々がなければ、陛下を王にしたのは誰だ？

ルデブラス。そいつは本當だ。陛下も豫言には服従なさらなければならぬ。

イクタリオン。もし陛下が神々にお背きになれば、國民は陛下の御身を切れ切れにして失ひ奉るだらう、つまり神々が國民を造り、言ひ換へれば、國民が神々を造つたのだから。

(ハアバガス豫言者の後を追つてそつと行く)

ルデブラス。もし陛下が此計をお見つけになれば、我々はひどい處刑になるだらう

イクタリオン。どうして陛下がお見つけ出しになると思ふ？

ルデブラス。陛下は神々が世にないといふことを御存じだから。

イクタリオン。神々が世にないものだとな誰がほんとに知つてゐるか？

ルデブラス。併しもし神々が世にあるものなら——

(豫言者ミハアバガス連れ立つて来る。イクタリオンは急いでルデブラスミハアバガスを追ひやる)

イクタリオン。陛下の御身の上に就いてちよつと内談があります。

豫言者。それでは私はあなたのお役には立ちますまい。わたくしはただ神々にお仕へ申す者だから。

イクタリオン。それは神々にも関係したことです。

豫言者。はいあ。それでは伺ひませう。

イクタリオン。このテツクの市は御身のお弱い王様の爲には頗る不健康な土地で

す。のみならず、此處では國王としてなさるべき必要なお仕事がないのです。

それに、バアバル・エル・シャアナツクの地を長いあひだ國王なしであけて置く

といふことは危険です、もしも——

豫言者。これは神々に關係してゐますかしら？

イクタリオン。神々に關係してゐるのはこゝです——もしも神々が此事を御存じ

なれば、あなたに豫言の靈を吹き込んで陛下に御忠告になるだらうと思ひま

す。神々が此事を御存じがありませんから、それで——

豫言者。神々は凡ての事を御存じです。

イクタリオン。神々は眞實でないことは御存じありません。此話は嚴密に云ふと

眞實でないのです——

豫言者。神々は虚言を言ふことが出来ぬものと書され教へられてあります。

イクタリオン。もちろん神々は虚言を云ふことは出来なさいません。しかし豫

言者は、人間に有益にして神々にも悦ばれる善い豫言を發表することが出来ず、たとへ其豫言が眞の豫言でなくとも。

豫言者。神々は此わたくしの口から物を云はれる、私の息は私自身の息であり、私は人間であり死すべき生命のものである。併し私の言葉は神々から来るので神々は虚言を云ふことは出来ない。

イクタリオン。神々が力を失つてしまつた今日の時代に、その神々のために、権力ある人間を怒らせることは賢いことでせうか？

豫言者。それが賢いことです。

イクタリオン。我々は三人で君は一人で此處にゐる。もし我々が君を殺して君の身體をそうつと簀の中へ隠さうとしたら、神々は君を助けるだらうか？

豫言者。もしあなた方がさういふとをなさるなら、それは神々がさう思召したからだ。もし神々がさう思召さなかつたら、あなた方にさういふ事は出来ませぬ。

イクタリオン。我々もそんなことは望まない。たゞ、君はどうしても此豫言をしてくれ——陛下の御前に行つて申上げるのだ、神々が仰せられた、神々は此市にゐる或る一人の人間を罰したまふから、三日の中に全住民が立退かなければ、神々は此市全體を滅し盡したまふであらうと、さう申上げてくれ。

豫言者。私にはそんな事は云へませぬ、神々は虚言をおつしやるとは出来ません。

イクタリオン。豫言者といふ者は、人の知らない大むかしから、二人の妻を持つ習慣になつてゐたのですか？

豫言者。もちろんです。それが掟のやうなものでした。(イクタリオン三本の指を出す)

何ですか？

イクタリオン。三人の妻——

豫言者。そんなことを云つて下さるな。それは長い前のことです。

イクタリオン。もし人が此話を知れば、君はもう神々に仕へることは許されない

に違ひない。神々も此事では君を護つては下さるまい、君は神々に對してもやつぱり罪を犯してゐるのだから。

豫言者。さうかと云つて、神々が虚言をおつしやるのは猶さら悪い。どうぞ此秘密を云つて下さるな。

イクタリオン。僕は自分の知つてゐる事はほかの者にも話さうと思ふ。

豫言者。私は嘘の豫言をやりませう。

イクタリオン。あゝ、君は賢く選んだ。

豫言者。神々に虚言を云はせるこの私を神々がお罰しなさる時、あなたにもどういふ罰をお與へなさるか、それは神々が御承知あることだ。

イクタリオン。神々は我々を罰しはなさるまい。神々が人間を罰したまうたのは、それはむかしのむかしのことだ。

豫言者。神々は我々をお罰しなさる。

(幕)

第二一幕

同じ舞臺。　あなじ日。

カアノス王。(左手を指して) 今あれを見るがよい、美しいではないか。入日の最後の光を受けてゐる。お前は今、蘭が美しくないと言ふことが出来るか？

イクタリオン。陛下、私は間違つてをりました。蘭は美しくございます。日の光を受けようと簾からうづ高く咲いてをります。勝いくさを歡ぶ國王の王冠のやうでございます。

カアノス王。あゝ、今こそお前はテツクの美しさを愛するやうになつて來た。

イクタリオン。陛下、まつたく左様でございます、私にも分かつてまゐりました。私は始終この市に住みたいと存じます。

カアノス王。うん、我々は始終この市に住まはう。テツクの市より美しい市は何處にもない。さうではないか？

ルデプラス。まつたく陛下の仰の通り、これ程の市は他にはございません。カアノス王。あゝ、わたしの云ふ事に何時も間違はない。

サアミヤ。テツクは美しうございますのね。

アロリンド。まるで、神様のやうでございますわ。

(高い調子の銅鑼が三度鳴る)

カアノス王。おう！ 豫言があつたと見える。豫言者を連れて来るがよい(従者一人退場)

(豫言者首を垂れてゆつくり歩きながら悲しきうに入り来る)

カアノス王。豫言をしたさうだな。

豫言者。豫言をいたしました。

カアノス王。その豫言を聞かう。(間)

豫言者。陛下、神々はこの三日のあひだに――

カアノス王。待つて！ 極まりの言葉を以て始めるのが例ではないか？(間)

豫言者。書よみに記され又教へられてある―― 神々は虚言いつはりを仰せられぬものであ

る――

カアノス王。それでよろしい。

豫言者。神々は虚言いつはりを仰せられぬものである。

カアノス王。左様、左様。

豫言者。此三日のうちに神々は或人に復讐したまふ爲に此市を滅したまふのである、凡ての人々は此市を離れ去らなければならぬ。

カアノス王。神々がテツクを滅したまふと！

豫言者。さやう。

カアノス王。何時この事が起る？

豫言者。三日の中に。

カアノス王。どういふ風に？

豫言者。それは、それは此事があるに相違ありませぬ。

カアノス王。どんな風に？

豫言者。それは——物音が起ります——木の割れるやうな音——地の中から雷の起るやうな音がします。一筋の裂目が出来て床を横切り鼠の如く走ります、赤い光が見え、凡ての光が消えて、暗黒の中にテツクは沈み落ちるであります。

(王は深い物思ひに沈む。豫言者は静かに出て行く。泣きながら上着を以て自分の顔を覆ふ。手を伸して道を探りやがて人に手を引かれて出て行く。王は考へ込んでゐる)

サアミヤ。陛下、お救ひ下さいまし。

アロリンド。お救ひ下さいまし。

イクタリオン。陛下、逃げなければなりません。

レデブラス。早速逃げなければなりません。

(王は無言の儘でなほ坐してゐる。やがて右の方にある杖を擧げて小さい銀の鐘を打たうとする、打たずにその杖を下ろす。やがて再び杖を擧げて鐘を打つ、従者一人入る)

カアノス王。あの豫言者を最う一度つれて歸れ。

(従者一禮して出る)

(王は考へ深い顔をしてゐる。他の一同は怯ぢ怖れた顔つきである。豫言者再び入り来る。)

カアノス王。神々が雨の季節に雨を豫言し、年老いたる者に死を豫言される時、我々はその豫言を信ずる。併し、あまりに信じがたい馬鹿らしい事、今の世に起る筈のないこと、プレツスの滅亡より此方^{この}我々の聞いたことのないやうな事を神々が豫言される時、我々の信仰は無理強ひされる。人間が虚言^{うそ}を云ふこと

はあるべきことかも知れぬ、神々が現今の世に一つの市を滅したまふといふ事はあるべきことではない。

豫言者。あゝ陛下、お恕し下さう。

カアノス王。お前の國王が神々に滅されようとする時、お前ばかりが無事に逃がれようといふのか？

豫言者。いや、いや、陛下、私は此市に止まります。併しながら、もしも神々が此市を滅したまはなかつた時、もしも神々が此わたくしを欺きたまうたのであつたらば――

カアノス王。もし神々がお前を欺きたまうたのならば、神々はお前の死を選びたまうたのである。なんで此わたくしから哀憐を求めようとする？

豫言者。もし神々が私を欺きたまうて、その上に何の罰も下したまはない時、陛下、私はあなたの哀憐を懇願いたします。

カアノス王。もし神々がお前を欺いたのならば、神々自身がお前をわたしの首切役の手から護るがよい。

第一衛兵。(笑ひながら第二の衛兵に) うまい事をおつしやる。

第二衛兵。うん、うまい。

カアノス王。もしその夕方この市が滅されなかつたら、その時は首切役が――

豫言者。陛下！

カアノス王。もうよろしい！ 疑ひもなく神々はその夕方この市を滅したまふのであらう。

(衛兵等くすくす笑ふ。豫言者人に引かれて出て行く)

イクタリオン。陛下、たとへ罪がございましても豫言者を殺すのは危険ではございませんか？ もし人民が――

カアノス王。彼が豫言者であるあひだは危険であらう。しかし、もし彼が偽の豫言

をしたものならば、神々も彼の死を求めたまふのである。ある時人民自身で豫言者を焼き殺したことがあつた、その豫言者が三人の妻を持つてゐたといふので。

イクタリオン。(ルデアラスに) 困つた事だ、どうしたらいいだらう？

ルデアラス。(イクタリオンにも) もしあの男が我々のことを白状すればあの男は殺されずに済む。

イクタリオン。(ルデアラスに) なるほど——それはさうだ。

(一同みんなで囁き合ふ)

カアノス王。みんな何を話し合つてゐる？

サアミヤ。陛下、わたくし共は神々がわたくし共一同をお滅しになりはしないかと恐れてをります、そして——

カアノス王。お前たちにもそれが恐ろしいか？

(死の如き沈黙。悲しうな歌の聲きこえる。王妃入り来る、白紙よりも蒼白い顔である)

王妃。あゝ、陛下、陛下、私は笛手の笛を聞きました。笛手の笛を聞きました。

カアノス王。死なうとする人の耳に聞えるといふ笛のことだらう。

王妃。わたくしは笛手ゴグオーザが笛を吹いてるのを聞きました。わたくしは死にます、死にます。

カアノス王。いや、いや、あなたはゴグオーザの笛を聞いたのではない。侍女たちを呼ぶがよい。王妃の侍女たちを。

王妃。わたくしはゴグオーザの笛を聞きましたから、最う死ぬのでございませう。

カアノス王。あや、わたしにも聞えるやうだ。あれはゴグオーザではない。唯の人間が笛を吹いてるのだ、わたしにも聞える。

王妃。あゝ、陛下にもお聞こえになる。陛下も崩御遊ばすのだ。おすぐれなされた王様がおかくれになる。陛下が崩御になれば、わたくしの子は孤兒になる。箴

の市の人たち、泣いておくれ。テックの人たち、泣いておくれ。そして首都の
 パアバル・エル・シヤアナック、國々の真中でお前も泣いておくれ、おすぐれな
 された陛下が崩御になる。

カアノス王。いや、いや、いや。(いちばんの年長者に)聞えるか、お前には聞えない
 か？

最も老いたる人。はい、聞えます。

カアノス王。現實の笛だ、靈が吹いてるのではない。

王妃。それでも、此人は年を取つてをりますから、四五日以内に此人も死ぬのでご
 さいませう。あれはゴグオーザでございます、そして陛下も崩御になるのでご
 さいませう。

カアノス王。いや、いや、あれは唯の人間だ。その窓から外を見るがよい。

(側にある近侍に云ふ)

近侍。陛下、暗うございまして、わたくしには見えませぬ。

王妃。あれは妖精のゴグオーザでございます。

近侍。わたくしにもはつきりと笛が聞えます。

カアノス王。此男は若いから大丈夫だ。

王妃。若い者は始終危険の中にをります、刃物の中を渡つて歩きます。此人も死
 ぬのでございませう、そして陛下と、わたくしと——。四五日内には、わたくし
 共は葬られてしまふのでございませう。

カアノス王。みんなで聞いて見よう。我々みんなが四五日うちに死ぬ筈はない。
 サアミヤ。わたくしにもはつきり聞えます。

王妃。女は死の手の花のやうなものでございます。女は死の側近く行くこと
 が度々でございませう。此人も死ぬのでございませう。

一同。私にも聞えます。私にも聞えます。私にも。私にも。私にも聞えます。あ

これは唯の人間が笛を吹いてゐるのでございます。

王妃。(少し安心して)わたしは其人が見たい、見たらば安心が出来るだらう。(窓の外を見る) 暗くて見えない。

カアノス王。もしあなたの望なら、其男を呼んで來させようか？

王妃。どうぞ。さうなれば私にも安心が出來て、眠ることが出來ませう。

(王は近侍に云ひ付けて外にやる。王妃はまだ窓のまゝにゐる)

カアノス王。誰か河のふちで笛を吹いてるのだらう。時々は一晩中笛を吹いてる者もあるといふ話だ。

サアミヤ。(小聲で)此處ではそれだけが楽しみなのですから。

アロリンド。此處で音楽と云へば、あれだけですもの。

サアミヤ。ほんとうに。

アロリンド。(小聲) あゝ、ほんとうに、私はバアバル・エル・シャアナツクの立派な

音楽堂がどんなに戀しいでせう。彼處あそこはちやうどテツクの市がはいり切るぐらゐ大きいかと思ひますわ。

(近侍再び入る)

近侍。陛下あれは普通の笛でございまして、誰にも聞えてをります。あれを聞かなかつたのは、たつた一人きりでございます。

カアノス王。聞かなかつたのは唯一人切りか、いや、御苦勞だつた。(窓にゐる王妃に) たゞの笛ださうだ。

王妃。一人の男があゝの笛を聞かなかつたのですか？ 其人は何といふ人？ 何處にゐます？ なぜ聞かなかつたのでせう？

近侍。その者はバアバル・エル・シャアナツクに歸らうとして、馬を乗り出すところでございます。ちやうど立つところでございます。笛の音は聞かなかつたと申してをりました。

王妃。あゝ、その人を此處へ呼んで来ておくれ。
近侍。もう其者は出立いたしてしまひました。
王妃。早く後を追ひかけて。追ひかけておくれ。

(近侍出て行く)

サアミヤ。(アロリンドに) 私もバアバル・エル・シャアナツクに歸りたいと思ひますわ。

アロリンド。もう一度世界の中心に歸れたらどんなに好いでせう！

サアミヤ。今も音樂堂のお話が出ましたのね？

アロリンド。えゝ、さうですわ。ほんとに美しうございましたわ！ 王様が彼處にいらしつて、髪の毛に大きな羽をつけた外國の音樂師が来て、私たちの名も知らない樂器をしらべた時はほんとに美しうございましたのね

サアミヤ。あの時分は王妃様も最つとおよろしうございましたわ。音樂がお藥に

なつたと見えます。

アロリンド。此笛手はひどく王妃様のお心を騒がせますのね。

サアミヤ。それもさうです。不思議はありません。陰氣な音を出しますもの。お聞きなさいまし！

アロリンド。聞かずにをりませう。聞いてると惡寒がして來ますわ。

サアミヤ。とても此人はナグラだの私たちの大好きなトレアニオンのやうには出來ませんのね。私たちがトレアニオンの音樂を聞いたことがあるので、此人の音樂を聞くのがいやなのでせう。

アロリンド。私は惡寒がするからいやなのです。

サアミヤ。王妃様が窓をおあけになつたから、それで寒いのでせう。

カアノス王。(近侍に) 笛を吹いてる男を探し出して、これを遣つてくれ。そして最う笛を止めてくれるやうに頼め。

(近侍出て行く)

イタタリオン。おや！ まだ吹いてゐる。

カアノス王。うん、我々みんなに聞える。たゞの人間が吹いてるのだ。(他の近侍に)
笛を吹くのを止めさせる。

近侍。かしこまりました。(出て行く)

(ほかの近侍一人の男を連れて来る)

近侍。これが、笛の音が聞こえないと申した男でございます。

カアノス王。さうか。お前はつんぼだらう、さうではないか？

男。いゝえ陛下、聾ではございません。

カアノス王。お前にわたしの言葉がはつきり聞えるか？

男。はつきり聞えます。

カアノス王。さけ——あの笛の音が聞えるか？

男。いえ、聞えません。

カアノス王。誰がお前にバアバル・エル・シャアナックに行けと云つたのか？

男。駱駝隊の大尉が私に行けと申しました。

カアノス王。それでは行け、そして最う歸つて来るな。お前は聾で、馬鹿なの

だ。(獨言) 王妃は眠れないだらう。(近侍に) 音楽を云ひ付けろ、早く云ひ付けろ

(また獨言) 王妃が眠れないだらう。

(男低く禮して出て行く。衛兵の一人に別れを云ふ。王妃は窓から首を出して獨言を云つてゐる。音楽が聞えて来る)

王妃。あゝ、これは普通の音楽だ、私には最う一つのあの音楽が恐ろしい。

カアノス王。我々はみんなあの笛の音を聞いた。心配なさるな、落付てゐなさい

王妃。それでも、一人聞かない人がありました。

カアノス王。その男はもう行つてしまつた。我々は今みんなあの音を聞いてゐ

る。

王妃。わたくしは其人に會ひたうございました。

カアノス王。一人の人間は小さなものだ、夜は大きく不思議に充ちてゐる。あなたはその男に會はない方がよかつた。

王妃。私は會ひたうございました。なぜ私が會つては悪いのでございませう？

カアノス王。わたしは駱駝隊に云ひつけて探がしにやつて、あの笛を止めさせるやう云ひ付けた。(イクタリオンに)王妃にあの豫言の一件を知らせてくれるな。王妃はきつと——

王妃は何と思ふか、わたしにも分らない。

イクタリオン。かしこまりました。

カアノス王。王妃はひどく神々を恐れてゐる。

イクタリオン。左様のやうでございます。

王妃。わたくしの事を何かおつしやいましたか？

カアノス王。いゝや。神々のことを話してゐた。

(音楽止む)

王妃。あゝ、神々のことをおつしやいますな。神々は恐ろしいでございます。凡ての、ありとあらゆる審判はみんな神々から来るものでございます。うねり曲がつた山々の霧の帷帳の蔭で、神々は鉄床の上の金屬のやうに未來をお造り出しになります。私は未來が恐ろしいでございます。

カアノス王。王妃の侍女たちを呼べ。早く侍女たちを。未來の爲に心配はなさらぬがよい。

王妃。人間は神々を笑ひます、ほんとにたびたび神々を笑ひます。きつと神々もお笑ひになるのでせう。神々の笑ひを思ふと怖ろしくなります。あの笛が！あの笛が！私には笛がはつきり聞えます。皆さんに聞えますか？聞えますか？聞えると誓つて云へますか？

カアノス王。聞える、聞える。我々一同みんなに聞える。唯の人間が吹いてゐるのだ。王妃、私はその人が見たうございます。見れば、其人が唯の人間で、神々の中の一番恐ろしいゴグオーザでないといふことが分かりますから、さうしたら私は眠れます。

カアノス王。(なだめる調子で) さう、さう。(近侍入り来る) わたしは笛を吹いてる男を探すやうに此者に云ひ付けたのだ。お前、笛吹きを見つけ出したか？ 見つけ出したと王妃にお話するがい。

近侍。陛下、駱駝隊は方々探しましてございますが、笛を吹いてる者は一人も見えないさうでございます。

(幕)

第三幕

三日の後のこと

サアミヤ。私たちはあんまりやり過ぎました。やり過ぎました。私たちの良人は死罪になるでせう。きつと豫言者が白状して私たちの良人が死ぬことになるのでせう。

アロリンド。どうしたらいいでせう？

サアミヤ。私たちのした事で良人たちが死罪になるくらゐなら、私たちは権禰でも何でも着てゐませうのに。

アロリンド。私たちは少しやり過ぎて王様をお怒らせ申しました。そして、ひよつと、神々までもお怒らせ申ししたかも知れません。

サアミヤ。神々までも！ 私たちはちやうどヘレンのやうになりましたのね。私の母が子供の時分一度ヘレンを見たことがあつたさうです、母の話では、ヘレンは極く静かな、極く優しい人で、たゞ人に愛されるのが好きだつたさうです。そしてあの人の爲にトロイでは四年も五年も戦争があつて、立派な塔のある市も焼かれてしまひました。なんでも、母の話では、ギリシヤの神々の中でもヘレンの味方になつたものと、敵になつたものがあつて、神々のお住居のオリンパスでも戦争があつたさうで、それもたゞヘレン一人の爲だつたさうです。

アロリンド。あゝ、もうよして頂戴、よして頂戴。私は恐ろしくなりました。私はたゞ綺麗な着物を着て自分の良人が幸福なのを見てさへゐればよいのです。サアミヤ。豫言者を御覽になつて？

アロリンド。えゝ、見ました。御所の周圍まわりを歩いてゐます。自由にしてはゐますが、逃げることは出来ません。

サアミヤ。どんな顔をしてゐます？ 恐れてゐるやうな顔ですか？

アロリンド。歩きながら獨言を云つてゐます。それから時々泣いたり、それから、上着で顔を隠したりしてゐます。

サアミヤ。あの人が私たちの良人の事を白状するかも知れません。

アロリンド。私は豫言者を信用することは出来ませんわ。豫言者は神と人との中立役でせう？ そして、神と人とはまつたく遠くかけ離れてゐますもの。どうして豫言者が雙方に對して眞實を盡せませう？

サアミヤ。あの豫言者は神々に不忠でした。嘘の豫言をする豫言者はいやなものですね。

(豫言者首を垂れて獨言をいひながら舞臺を横切る)

豫言者。神々が虚言うそを云はれた。神々が虚言うそをいはれた。神々の凡ての復讐も此あやまちを償ひ得るであらうか？

サアミヤ。復讐のことを云つてゐます。

フロリンド。あゝ、きつと良人たちの事を云ひつけるのでせう。

(二人泣く。王妃入り来る)

王妃。何を泣いてゐます？ あゝあなた方は死ぬのですね？ 死の笛を聞いたのでせう？ 泣くのがほんたうです。

サアミヤ。いゝえ。あれは唯の人間で、三日も吹き続けてをりました。わたくし共はみんなあの笛をききました

王妃。三日。さう、さう、三日だ。ゴグオーザは三日より長くは笛を吹かない。

ゴグオーザは三日で草臥れてしまふのだ、ゴグオーザは最う自分の使命を果したから、何處かへ行つてしまふのでせう。

サアミヤ。王妃様、私どもはみんなあの人の笛を聞きました、聞かないのはバル・エル・シャアナツクへ歸つて行つた聾の若い人ばかりでございます。今で

も笛が聞えてをります。

王妃。さう！それでも、誰も其人を見た者がないでせう？ 私の侍女は方々探して見たけれど、見つからなかつた。

サアミヤ。王妃様、私の夫も、ルデプラスも、あの笛を聞きました、あの二人が生きてをります間は何も恐れることはございません。もしやあの二人が王様の怒りに觸れるやうな事がございましたら——妬み深い人間の口を洩れるつまらぬ言葉か——罪人が自分の處刑を延ばして欲しい爲に何か申上げるとかして——王様の怒りに觸れることがございましたら、二人は王様の怒りを受けながら生きてはをりますまい、きつと血管を切つて自殺いたしますのでございませう。さうしたら、イクタリオンとルデプラスの聞いたのは死の笛であつたといふ事になりますのでございませう。

王妃。王様は決してイクタリオンやルデプラスをお怒りになるやうなことはあり

サアミヤ。もし王様があの二人にお怒りになりましたら、あなた様はお眠りになれませんでございませう。

王妃。ほんに、さう。わたしは眠れないだらう。そしてそれがどんなに恐ろしいことだらう。

サアミヤ。あなた様は夜中お眼覚めでお泣き遊ばすでございませう。

王妃。ほんにさうだ。私は眠れないで夜中泣いてゐるだらう。(王妃出て行く)
アロリンド。王妃様は王様に何の勢力もおありにならない。

サアミヤ。ええ。ですけれど、王様は王妃様が夜中お泣きになるのをお聞き遊ばすのがお嫌ひですわ。(イクタリオン登場)きつと豫言者があなたの罪を白状するでせう。併し私たちは王妃様に今お話をしましたの、もし王様があなたの方二人をお怒りになつたら、それがどんなに恐ろしい事だらうと申上げたら、王妃様は

もし王様がお怒りになつたら、御自分は夜どほしお泣きになるだらうつておつしやいました。

イクタリオン。かはいさうな亂れた頭腦ちたま！小さい妄想は何といふ力強いものであらう！美しい王妃であられる筈なのに、神々を恐ろしがつて蒼白い顔をして泣いて歩かれる。その神々はたゞ月夜の影と同じものだ、人間の恐怖心は神秘の中に不氣味に大きくなつて、自分の影を地に映し出す。すると人間は躍り上がつて「神々」と云ふのだ。なんの、神々は影よりもつまらないものだ、我々は影を見たことはあるが、まだ神々を見たことはない。

サアミヤ。そんな事をおつしやるな。昔は神々があいでになつたのです。神々があのプレッスをすつかりお滅しになつたのですから。もし神々が山々の暗い陰に今でもあいでになるものなら、ひよつと、あなたの言葉が聞えるかも知れません。

イクタリオン。なんだ！ お前までが怯けて来たのか。怯けなくともよい。俺たちは行つて豫言者と談話をして来る、お前は王妃様の方へ行け、なりたけ、王妃様と御いつしよにゐて、もし王様が我々の事でお怒りになつたら、お泣きなさることをお忘れなさらぬやうにするがよい。

アロリンド。私は王妃様と御一緒にをりますと、何だか怖くなりますわ。お側に行くのがいやになります。

サアミヤ。私たちをどうもなさりはしないでせう。王妃様は何でもかでも怖がつていらつしやるのですから。

アロリンド。王妃様のおかげで私は馬鹿げた事までめちやくちやに怖くなりますわ。

(サアミヤとアロリンド去る)

(ルデプラス入場)

ルデプラス。豫言者が此方の方へやつて来る。

イクタリオン。まあ腰を掛けよう。我々はあれと話をしなければならぬ。我々のことを云ひ出すかも知れぬから。

ルデプラス。豫言者が我々の事を云ひ出してどうする？

イクタリオン。嘘の豫言はあの男の罪でなくつて、我々の罪だもの、もし王様に申上げれば、あの男をお宥しになるかも知れぬ。それにあの男は歩きながら復讐と云ふことをつぶやいてゐる。みんなが僕に聞かしてくれた。

ルデプラス。もし我々の事を申上げたにしろ、王様はあの男をお宥しにはなるまい、王様に嘘の豫言を申上げたのはあの男なのだから。

イクタリオン。王様はお心の中では神々を信じてはいらつしやらない。御自分を欺いたと云ふので豫言者をお殺しになるのだ。もし我々が計畫んだ事だと御承知になれば――

ルデブラス。豫言者に何といふ積りだ？

イクタリオン。此方から何も云ふことはない。たゞあの男がどうする積りか談話はなしの模様で探ぐるんだ。

ルデブラス。そら、やつて来た。あの男のいふことはみんな覚えてゐることによらう。

イクタリオン。あの男の眼を注意してくれ。

(豫言者入り来る。上着で眼を隠してゐる)

イクタリオンとルデブラス。神々はみめぐみ深い。

豫言者。神々は憐み深い。

イクタリオン。僕が悪かつた、ほんとに、僕が悪かつた。

ルデブラス。陛下はお心を和らげられるだらうと思ひます。

イクタリオン。陛下はいつも日の入り際にはお心を和らげられる。夕方、蘭の花

をお眺めになる、ちやうど其時分は蘭の花が非常に美しい、それでもし陛下が怒つておいでになつても、日の沈む時すゞしい風が吹いて来ると、陛下のお怒りが消えてしまふ。

ルデブラス。日の入り際には、きつとお心を和らげられるに相違ない。

イクタリオン。怒らないでくれ、ほんとに僕が悪かつた。どうか怒らないでくれ。

豫言者。私は陛下が日の入り際にもお心を和らげられることを望まない。

イクタリオン。悲觀したまふな。

豫言者。まづたく私は神々を賣つたのだ。

イクタリオン。聞いてくれ、そんなに悲觀しないで。神々なんてありはしない。

神々がないといふことは誰も知つてることだ。陛下だつて御承知だ。

豫言者。あなた方は神々の豫言者が虚言うそを云つたのを聞いて、神々は最う死んだものだとお信じなさるか？

ルデプラス。まつたく神々はないものだ。よく解つてる事だ。

豫言者。神々は今もおいでになる、神々はあなた方に復讐をなさるだらう。お聞きなさい、どういふ風になるか、聞かせて上げる、そしてあなたにも——

お聞きなさい——いや、いや、神々は山の暗がりくろがりに沈黙しておいでになる。私が嘘の豫言をして以來、神々は一度も私に物を云はれない。

イクタリオン。君の云ふとほりだ、神々は我々をお罰しなさるだらう。今この際には何も物をおつしやらないと云ふのも本當だらう。併し、きつと我々をお罰しになるだらう。だから、たとへ、どういふ原因があつたにしろ、人間が我々に復讐をするといふのは、無用の話だ。

豫言者。それは無用のことです。

イクタリオン。それに、人間が神々の先き廻りをして我々を罰するとしたら、それは現在以上に神々を怒らせるかも知れない。

豫言者。神々は疾くいらせられる、如何なる人間も神々に先んずることは出来ぬ。

ルデプラス。人間がそれを試みようとするのは馬鹿げたことだ。

豫言者。日は低く沈みかけてゐる。もうお別れします。私は常に夕日を愛してゐました。夕日が金にへりどられた雲の中に沈んで見馴れた萬物を目あたらしくするのを見に行きませう。日が入つて夜が来る、悪が行はれて神々の復讐が来る。

(豫言者左手に出て行く)

ルデプラス。(卑しむやうな驚きを以て)あの男は、ほんとに神々を信じてゐる。

イクタリオン。あの男は王妃と同じやうに狂人だ。又あの男に會ふことがあつたら、あの狂氣まがひに調子を合せて置くことだ。萬事大丈夫さうだ。

(首切役一人豫言者の後を忍んで追ふ。首切役は緋繻子の膝までの服を着てゐる。皮帯をしめて役目

の聲を携へてゐる)

二二八

ルデブラス。今行く時怒つてるやうな聲だつた。まだ我々の事を云ひ出すかも知れぬ。

イクタリオン。大丈夫だらう。あの男は神々が我々を罰するものと思つてゐるから。

ルデブラス。それも、何時までさう思つてるだらう？ 王妃の空想と來たら、一時間に三遍は變るから。

イクタリオン。首切役が今あの男の直ぐ後に從いて行く。時が立てば猶更近く寄つて來る。豫言者が氣を變へる時間はなささうだ。

ルデブラス。もし豫言者のあの氣分が變れば、我々の事を云ひ出すだけの意志はあるのだ。

イクタリオン。首切役はあの豫言者が御執心だ。あれも今度新しい首の切方を發

明したんだが、テックへ來てからまだ一人の男も殺す機會がなかつたから。

ルデブラス。熱心な首切役は困るね——陛下がそれを御覽になつて何かお考へつきになるかも知れぬ——

イクタリオン。日が随分ひくくなつた。もう我々の事を云ひ出す暇はあるまい。

陛下はまだおいでにならない。

ルデブラス。おいでになるところだ。

イクタリオン。併し豫言者は此處にゐない。

ルデブラス。まだ來ないな。

(カアノス王入場)

カアノス王。王妃の侍女たちが何も心配はないと云つて王妃を静めてくれた。上出來だつた、今わたしの前でみんなが踊つてくれるさうだ。王妃も眠れるだらう。上出來だつた。あゝイクタリオン、イクタリオン、此方へおいで。

二一九

ルデプラス。なぜ陛下が君をお召しになるのだらう？

カアノス王。イクタリオン、お前は間違つてゐた。

イクタリオン。陛下！

(ルデプラス見守つてゐる)

カアノス王。お前はテックが美しくないと思つてゐたが、それは間違つてゐた。イクタリオン。間違つてをりました、私が悪かつたのでございます。

カアノス王。さうだ、テックは夕方になると非常に美しい。わたしは蘭の花の上に夕日が沈むのを見よう。わたしは最うバアル・エル・シャアナックを二度と見たくない。わたしは此處に腰かけて夕日が蘭の花の上に沈むのを見よう、日が全く隠れて花の色が變るのを見よう。

イクタリオン。只今は非常に美しい景色でございます。何といふ静かでございます。私はまだこんな静かな夕日を見たことはございません。

カアノス王。死にかけて畫工が描いた畫のやうだ、美しい色で充ちてゐる。もし萬一この蘭の花の凡てが今夜死んでしまつても、彼等の美は忘れがたい記念であらう。

ルデプラス。(イクタリオンに) 豫言者が此方へ歩いて来る。

イクタリオン。陛下、豫言者が御所の周圍を歩き廻りまして、首切役がその後に従いて廻つてをります！ もしも王妃様が御覽になりましたら、御心をお痛めにはなりませんまいか？ 今すぐ殺してしまひました方が宜しくはございませんか？ 首切役に合圖いたしませうか？

カアノス王。今はいけない。日の入る時とわたしは云つた。

イクタリオン。陛下、日の入る前の方が慈悲深い仕方でございます。人間が日を愛するのは自然の人情でございます。日が入るのを見て、それが最う二度とは歸らないと分かりましたら、それは二度死ぬやうなものでございます。唯今殺

してやりました方がお慈悲深うございませう。

カアノス王。わたしは——日の入る時と云つた。豫言者の豫言が虚言であると證明されない前に殺すのは不義である。

イクタリオン。しかし陛下、あの豫言が眞實ではないと私どもは信じてをります。豫言者もそれは存じてをります。

カアノズ王。彼は日の入る時に死ぬのだ。

ルデブラス。陛下、豫言者もし唯今殺されませんければ、きつと命乞をいたしませう。それをお許しになるのは無駄な事でございます。

カアノス王。王の言葉は死ではないか？ 彼が日の入る時に死ぬとわたしは云つたのだ。

(豫言者入場、首切役すぐ後に忍び来る)

豫言者。あゝ神々は虚言を云はれたことになる。神々が虚言を云はれたのだ。私

は嘘の豫言をした。神々が虚言を云はれたのだ。私が死んでも 他のもが罰せられても、此償ひにはならぬ。

イクタリオン。まだ我々の事を訴へるかも知れぬ。

豫言者。あゝなぜ神々の聲が私の唇を通つたのか？ あゝなぜ神々は、おん聲が虚言を云ふのをお許しなすつたか？ 代々を經ていづれの國にも、神々は虚言をいはれないものと知られてゐる。野の遊牧民もそれを知つてゐる。黎明を待つ山人もそれを知つてゐる。それなのに、もうそれも終りとなつた。あゝ陛下、どうぞ私を今すぐお殺し下さい。私は偽の豫言をしました、日の入る時、神々が虚言を云はれたことになりました。

カアノス王。まだ日の入り前である。疑ひもなく、お前は眞實の豫言をしたのだらう。(王妃入り来る) 王妃は大へんに機嫌がいい、侍女たちがうまくやつてくれ

（リオンに）王妃があんなに落ついておられるのを見ると少し恐ろしくなる。王妃は、ちやうど暴風が来て吹雪が全世界を埋めてしまふ前の静かな風のない冬の夕方のやうに見える。

イクタリオン。私は静かな夕方を好む。静かな夕方は何事が起りさうに思はせる。さうだ、王妃は大へんに静かだ。今夜はお眠りになれるだらう。

王妃。もう私はなんにも恐ろしい事はない。私の頭の取り止らない想像はみんな消えてしまひました。私はつまらない恐怖で度々あなた方をお困らせしました。もうそれがすつかり落付いて私は何も怖くなくなりました。

カアノス王。それは結構だ、わたしも嬉しい。あなたも今夜はよく眠れるだらう。王妃。眠る？ え、——それは眠れませう。わたくしども一同が眠れませう。

カアノス王。何も怖いことはないとあなたの侍女たちが聞かせたのだらう。

王妃。なんにも怖いことはないかと？ ほんとうに、もうつまらない怖れはなくな

りました。

カアノス王。なんにも怖いことはないとあなたに一同が聞かせたらう？ ほんとに怖い事は何もありません。

王妃。つまらない恐怖はもうなくなりました。その代り、一つ大きい恐怖があります。

カアノス王。大きな恐怖！ それは、何だらう？

王妃。云ふのは止めにいたしませう。あなたは私が物に恐れてをります時分は始終慰めて下さいました。それを、いま最後になつて私があなたに心配おさせ申すのはすまない事でございます。

王。あなたの恐怖はどんな事か？ 侍女たちを呼ばうか？

人の恐怖ではございません。それは凡ての人類の恐怖でございます。がそれを知つておれば。

「あゝ、あなたは赤い着物の男を見たな。あれは追ひわたしは——」

「いえ、私の恐怖はこの地上のものではございません。私はもう小さな事なんぞ何も恐ろしくなくなりました。」

カアノス王。それでは、何が恐ろしい？

王妃。私にもよく分かりません。しかし、あなたも御存じの通り、私は常づね神を恐れてをりました。その神々が今何か恐ろしい事をなさりやうでござります。

カアノス王。大丈夫、現代の神々は何もしやしない。

王妃。あなたはほんとうに私に好くして下さいました。あの駱駝が菖蒲の澤のほとりのアルガン・ゼーリスに來たのも、まだほんの此頃の事のやうに思はれます。駱駝が、金糸の帳の轎を載せて、見上げるやうに高い頭の上には婚禮の

銀の鈴をつけて來たのも、まだ此頃のやうに思はれます。こんなに早く終りが來ようとは私は思ひもいたしませんでした。

カアノス王。何の終りが？ 誰に終りが來るのか？

王妃。御心配なさいませぬ。私ども運命のために心を煩はせませぬ。世界と世界のなかの日々の氣苦勞と、あゝ！ 恐ろしい事でございます。しかし、運命は、私は笑つて運命に向ひませう。私どもが笑つて向へば、運命も私どもを損ふことは出來ませぬ。

カアノス王。何の終りが來るとあなたは云ふのか？

王妃。私も存じませぬ。たゞ、今まで在つた何ものかが、もうなくなるのでございませう。

カアノス王。いや、いや、テックを見るがよい。テックの市は岩の上に築かれて、我等の宮殿は全部が大理石である。時は六百年を経て此城を傷つけもしな

かつた。六百年はその強い爪で引き裂かうとした。我等は黄金の上に王位を置き大理石の上に家居してゐる。死も何時かは此わたしを探し出すであらうが、しかし、わたしはまだ若い。我が父上も又その父上もあるひはパール・エル・シャアナツクで或ひはテツクで死なれたが、我が王朝は此代々を経て古びた城壁の上から平然として時の顔を笑つてゐる。

王妃。お別れのお言葉をおつしやつて下さいまし、何かあるまいものでもありません。

カアノス王。いや、いや、不吉な事は云ふまい。

首切役。日が沈みましてございます。

カアノス王。まだだ。鏡が日を隠してゐる。まだ沈みはせぬ。蘭の花の上の美しい光を見よ。あの蘭の花は今までも何百年となくテツクの輝く壁にその紫の色を映してゐた。あの色は今から後も何百年か我が不朽の城の上に映るのであら

置き忘れた帽子

う、大理石に不朽の、詩に不朽の、わが城の上に。あゝ、花の色が變つて行く。
(首切役に)日は沈んだ。豫言者を連れて行け(王妃に)あなたが見たのは彼の終
りであらう。

豫言者。神々は虚言を云はれた。

カアノス王。あの簾が沈み出した！ 簾が地に陥入りかけた！ (王妃少し微笑して王
の手を支へてゐる) 全市が沈みかけた！ 家々が我々の方に動いて来る！(遠雷の音)
イクタリオン。ちやうど波のやうに動いてまゐります、そしてそれと同時に暗黒
がまゐります。

(音高く長く雷が鳴る。赤い稲妻、それから眞つ暗になる。やがて又少しの光が止つて、倒れた人々の姿、白い大理石の壊れた柱や岩の破片を見せる)

(豫言者は背中を押しつぶされてゐるが、暫時のあひだ上半身をもたげる)

豫言者。(勝ち誇つたやうに) 神々は虚言を云はれなかつた。

イタタリオン。あゝ、わたしは死ぬのだ。(遠く笑聲きこえる) だれか笑つてゐる、此テックで笑つてゐる！ 全市は破壊されたのだ。(笑聲、悪魔の聲の如く聞える) あの恐ろしい聲は何だ？

豫言者。あれは虚言を云はれぬ神々の笑ひ聲だ、神々は今山に歸つて行かれる。

(豫言者死ぬ) (幕)

おき忘れた帽子

(二幕)

人

客

労働者

店員

詩人

巡査

所

ロンドンのはいからな街

ある家の入口に一人の客が立つてゐる、客は、流行の粋を極めた服装をしてゐるが、帽子を被つてゐない。はじめは大へんに困つた様子であつたが、ふいに新しい考を思ひついた様子。

労働者がやつて来る。

客。君、ちよつと、ちよつと——まことに何だが——ちよつと、その——ちよつと手を貸してくれないか——實は、手を貸して貰へると好都合なんだが——

労働者。どんな御用なんです？

客。實は、君に頼みたいと云ふのは、唯ちよいと其ベルを鳴らして、取次に云ふんだ——え、——なんとも云ふんだ、下水を見に来たとか、なんとか、君の云ひたいことを云つて、僕の帽子を取つて来て貰ひたいんだ。

労働者。帽子を取つて来るんですつて！

客。うん、此とほり、僕は運悪く帽子を置いて来てしまつた。客間にあるんだ(窓を指して)、あすこの座敷だ、座敷のずうつと向うの隅の、長いソファの隅のと

ころにある。もし君がはいつて行つて其帽子を取つて来てくれれば、まづたく

僕は——(労働者の表情變る) おや、君どうかしたのか？

労働者。(断然) さういふ仕事はわしや嫌きらえだ。

客。かういふ仕事が嫌ひだつて！ だつて君、そんな馬鹿な事を云つて、なんにも悪いことはあるまいぢやないか？

労働者。そこんとは、わしにも分かりません。

客。だけど、こんなつまらない事を頼んで、何も悪いことがあるわけぢやあるまい？ 何か悪いことがあると思ふのか？

労働者。なあに、大丈夫らしうござんすがね。

客。ぢやあ、いゝぢやないか。

労働者。斯ういふやま仕事と云ふものは、みんな大丈夫らしく見えるもんです。客。併し僕は君に此家へ泥棒しにはいつてくれと頼んでるんぢやない。

労働者。そりや、たしかに、さうは見えませんが、併し、なにしろ、どうも不氣味だ。もし萬一、わしが家うちん中へ這入つてから、何か欲しい物があつたら、どうしたもんでせう？

客。僕は帽子さへあればいいんだ——あ、これ、これ、まあ逃げないでくれ！

——此處に一サバレンある、ほんの二三分間の仕事だよ。

労働者。わしがあんたに聞きてえのは——

客。うん？

労働者。——その帽子の中に何があるんです？

客。帽子の中に何がある？

労働者。え、そいつが聞きたいんで。

客。帽子の中に何があるつて？

労働者。さうです、まさかあなたも、たゞで一サバレン下さる筈はありますま

~~~~~

客。ニサバレンやつてもよろしい。

労働者。あなただつて、一サバレンをニサバレンまで競り上げてわしに下さりは  
 しますまい、たゞのからつぼの帽子ぢやあ？

客。だつて、僕は帽子が入用なんだから。此様子で往來が歩けるかい？ 帽子の  
 中には何もないんだ。何が帽子の中にはいつてると君は思ふんだ？

労働者。なあに、わしはそれを云ひ當てるほど器用ぢやないんですがね、まあ云  
 はば、何か書類みてえな物が帽子ん中にはいつてるかと思ふんで。

客。書類が？

労働者。へえ、その書類はね、もしそれがあなたの手にあれば、あなたが此大きな家の相續人ちやくじんになれて、何處か他の罪はかもない善人が追つ拂はれると云ふやうな筋なんでせう。

客。おい、おい、帽子はまつたく空虚からっぽなんだよ。僕は是非その帽子が入用なんだ。もし萬一その中に何かあれば、それは約束の二ポンドと一緒に君にやつてよろしい、たゞ僕の帽子さへ持つて来てくれれば。

労働者。へえ、そいつあ全く大丈夫さうだ。

客。そんなら、ちよつと行つて、取つて来てくれるか？

労働者。わしにも、あなたにも、大丈夫さうに見えますが、こゝで二人で考へなくつちやならないのは警察ですよ。警察にも大丈夫に見えますかね？

客。おい、後生だ——

労働者。分かりましたよ！

客。お前はから馬鹿だ。

労働者。分つてます。

客。あゝ、あゝ。

労働者。分かつてますよ、旦那、だめです。

客。これ、これ、まあ逃げないでくれ。

労働者。だめですよ！ (去る)

(店員来る)

客。ちよつと、君。君に願ひするのは失禮ですが、しかし、ごらんの通り、僕は帽子がないのです。それで、何とも恐縮ですが、一寸取つて来て預けないでせうか。時計を直しに來たとか、何とか云つて、ごまかして下さらないでせうか。僕は此家の客間の、向うの隅の長椅子の隅に置いて來たんです。

店員。はあ、それは——よろしうございますが、たゞ——

客。ありがたう、どうも何とも恐縮です。時計を直しに來たとか何とか云つて下  
ろす。

店員。私は——え——實は時計を直すことがあんまり上手ではないんでして。

客。なあに、それは構ひません、たゞ時計の前に立つていゝ加減にいじつておれ  
ばいゝんです。もともと、みんな、さうなのですから。それから君に一寸注意  
して置きますが、客間には婦人が一人ゐます。

店員。へえ！

客。しかし、なあに、それは差支ありません、ずうつと前を通つて時計のところ  
へ行けばようござんす。

店員。しかし、お言葉ですが、その部屋にどなたかおいでだとしますと――

客。なあに、その人は、まだ若い、非常に、非常に美しい人なんです。

店員。なぜ、御自分で取つていらつしやらないんです？

客。それが出来ない事なので。

店員。出来ない事？

客。僕は足くびを挫いてしまつて。

店員。それは！ ひどくいけませんか？

客。え、ずゐぶんひどくやつたんです。

店員。手を引いて上げてもようござんすが。

客。いや、それは猶たまりません。僕は是非どうしても足を地べたにつけてゐな

ければならないんです。

店員。しかし、どういふあんばいにしてお家へお歸りになります？

客。平地なら、歩いて何ともないんです。

店員。それでは、これで御免を蒙りませう。大分時間が遅くなつたやうです。

客。併しどうかお願ひですから、待つて下さい。此通り僕は帽子なしで捨てゝ行  
かれては困るんです。

店員。折角ですが、大分遅くなりましたから。(店員去る)

(詩人來る)

客。失禮ですが、お呼び止めて失禮ですが、誠に恐縮ですが、一つお願いを聞いて下さらんでせうか。僕はこの家を訪問に来て、あいにく帽子を置き忘れて来たんです。向うの隅の長椅子の下にあるのですが、もしあなたがピアノを直しに来たとか何とかおつしやつて、其帽子を取つて来て頂ければ幸ですが、

詩人。併し、どうしてあなたが自分で取りに行かれないんです？

客。それが出来ないのです。

詩人。その理由をお聞かせなされば、僕もお助けしないものでもありません。客。それは申し上げられません。私はもう二度と此家にはいれないのです。

詩人。もしあなたが人殺しをやつたとしても、隠さずおつしやい。僕はあんまり道德の方は構はない方だから、あなたをその爲に絞罪にしようとも思ひませんから。

客。僕が殺人者のやうに見えますか？

詩人。いや、もちろん、さうは見えません。たゞ、あなたが十分僕を信用なすつてもいゝと云ふだけの意味です。法律とか刑法とかいふものは僕には少しの興味もありません。むしろ殺人それ自身が僕に取つてはある魅力を持つてゐます。僕はやさしい神経質な詩ばかり書いてゐますが、不思議なことには、殺人犯の公判といへば、洩さず讀みます、そして僕はいつでも罪人の方に同情するんです。

客。しかし僕は殺人者ではありませんから。

詩人。そんなら、何をしたんです？

客。僕はこの家の婦人と喧嘩をやつてしまつたんです。それでボスニヤ人と一緒になつてアフリカで死なうと決心したところなんです。

詩人。實にうつくしいですな。

客。あいにく僕は帽子を忘れて来たんです。

詩人。あなたは望みのない戀のために、遠くの方の國で死なうとなさる、それは昔の古詩人のやつたことです。

客。しかし、あなたは僕の帽子を取つて来て下さるか？

詩人。それは無論、悦んで取つて来て上げます。併し我々は此家にはいる相當な口實を見つけないければ。

客。ピアノを直しに来たと云つたらいいでせう。

詩人。あいにく、それは出来ません。不器用にピアノをいじる音といつたら、何處かの國に、頭の或一部分に冷水をポツリポツリきりなしに落としかける刑罰があるさうですが、ちやうど僕にはそれと同じぐらゐの苦痛です。それは、その――

客。併し、それではどうしませう？

詩人。ある家で、親切な友人たちが僕に詩人として必要な生活の保證と、慰安と

を與へてくれたのでしたが、其家に一人の婦人の家庭教師がゐて、ピアノがあつたのです。もう其時から何年にもなりますが、いまだに僕は内心恐怖なしで其友人たちの顔を見に行くことが出来ないんです。

客。それでは、何か別の事を考へませう。

詩人。あなたは、むかしの詩にある、時としては國王が鎧も着ずに、その戀する貴婦人の肌着だけを身に着けて戦つたといふやうな、ロマンスの時代を此の不幸な現代に持つて來たのです。

客。さうです、併し何しろ先づ帽子を取つて來なければ。

詩人。なぜです？

客。帽子を被らずに往來を歩くことは出来ません。

詩人。なぜ、いけません？

客。それは出来ません。

詩人。しかしあなたは外形的けいけいのことと人世の大事とを混同していらつしやる。

客。あなたが人世の大事とおつしやるのは、どういふ意味か知りませんが、ロンドンで身綺麗な風をしてゐるといふことは、私に取ては可なり大事なんです。

詩人。帽子は人生の大事ではありません。

客。僕は失禮な事をいひたくありませんが、僕の帽子はあなたの帽子と少し違ひます。

詩人。まづ腰をかけて、もう少しつまる事に就いて話させう、百年後になつても記憶されるやうな事に就いて話させう。(二人腰かける) さういふ見地からいふと、帽子なんぞのつまらなさが直ぐ分かります。しかし、死ぬといふこと、望みのない戀の爲に美しく死ぬといふことは、それは詩になります。つまり事の大小の區別ですね——試みに詩の中に入れて想像して見るのです。帽子では詩は作れません。

客。僕の帽子であなたが詩が作れようと作れまいと、僕は一向構ひません。たゞ僕は、帽子を被らずにロンドンの市街まちを歩いて自分を見つともない恰好にしたくないだけの事です。だから、あなたが帽子を取つて来て下さるんですか、下さらないんですか？

詩人。ピアノを一寸でもいじるといふ事は僕にはとても出来ない。

客。それでは暖房器を見に来たと云つて下さい。此處の家では窓の下に一つあります、それが漏れるといふことを僕は知つてゐるんです。

詩人。それには何か美術的の裝飾があるんでせう？

客。え、あつたやうです。

詩人。それでは僕はそれを見るのも、側へ行くのも、まつびらです。あゝいふ鑄物の裝飾を僕はよく知つてます。徳利のやうな腹はらをした埃及の神のピースといふやつを或ところで見たことがあります、その神はもともと不様ぶさまに見えるや

うに出来てるんですが、いくら其ぶざまな神だつて二十世紀が機械で造り出すあゝいふ裝飾ほどに不様ではありません。鉛工びりきやが藝術に何の關係があつて裝飾に手を出すんでせう？

客。それでは僕を助けてはくださらないんですね？

詩人。僕は不様な物を見たくなし、いやな音を聞きたくありませんが、何かほかに相當な工夫をあなたが考へ出せば、助けて上げて宜しい。

客。僕はほかに何も考へられません。あなたは鉛工びりきやにも見えす時計直しにも見えませんが、もう其ほかに何も工夫が出ません。僕は恐ろしい試練に會つて、靜かに物を考へてる境遇ではないのです。

詩人。それなら、あなたの帽子は今の新しい運命に捨てて置くことです。

客。なぜあなたが何か考へて下さらない？ 詩人なら、考へることはあなたの専門です。

詩人。もし僕が帽子なんぞといふそんな馬鹿げた問題を少しの間でも考へて見ようとしたら、勿論僕にも工夫が出るに相違ない、しかし其問題の馬鹿らしさが、僕の考を逐ひ拂つてしまふんです。

客。(立上がる) それでは僕が自分で取つて來ます。

詩人。お願ひだ、それは止めて下さい！ それがどういふことか考へて下さい。

客。それは、をかしいのは分かつてますが、帽子なしでロンドンを歩くほどをかしくはありません。

詩人。僕はそんな意味ではない。あなたは仲直りしてしまふでせう？ あなた方二人は互に許し合つて、結婚をして、ほかの誰でもものやうに騒々しいできものだらけの子供が澤山できて、それつきりロマンスは死んでしまふんです。いけません、そのベルを鳴らしてはいけません。それよりは銃劔でも何でも、人の買ふ物を買つて、ボスニヤ人の軍にはいつて下さい。

客。帽子がなくつては駄目です。

詩人。帽子が何ですか！ あなたは帽子の爲に美しい運命を犠牲にするんですか？ 失戀のために死んだあなたの骨が果てしてもない黄金の沙漠の上に人知れず捨てられて、見る人もなく忘れられてゐるのを考へて御らんなさい。キイツが云つたやうに「人知れず捨てられる」んです。何といふ言葉でせう！ 人しれずアフリカに捨てられて、ひるは呑氣なベドイン人がその邊を往つたり來たりして、よるは獅子の唸り聲が沙漠のかなしみの聲とも聞えるでせう。

客。實際の事をいへば、あなたがアフリカのことを沙漠といふのは違つてゐます。つまり、アフリカが世界中でいちばん豊饒な土地だといふので、ボスニヤ人がそれを取らうとしてゐるのでせう。

詩人。そんなことが何ですか？ あなたの名は地理や統計學に依つて記憶されるのではないのです、たゞ、金の言葉のロマンスに依つてです。ロマンスは、僕

が今いつたやうにアフリカを見てゐるんです。

客。まあとにかく、帽子を取つて來ます。

詩人。考へて下さい！ 考へて下さい！ もしあなたが其戸口に入れば、あなたが最も勇敢なボスニヤ人の中で死ぬことはもう出来なくなります。あなたが遠い寂しい國で死んで無限に廣いサハラに横たはることはもう出来なくなります。そしてあの婦人があなたの美しい運命のために泣いて、自分の無情だつたことを自ら責めることも出来なくなります。

客。お聞きなさい！ あの人がピアノを弾いてゐる。僕はあの人が此事のために何年となく不幸な思ひをしやしないかと思ふんです。それが望ましいことだとは思はれません。

詩人。さうです。併し僕があの人を慰めてあげませう。

客。とんでもない！ 君が！ ほんたうに、とんでもないことだ。

詩人。まあ落ついて、落ついて。僕はそんな意味ではないんです。

客。それでは、ぜんたい、どういふ意味です？

詩人。僕はあなたの美しい死に就いて、歡びの歌や悲しみの歌を作る。古詩人の  
 貴い傳説を再びくり返すから、歡びの歌だ、君の悲しい運命と悲しい戀を唄ふ  
 から、悲しみの歌だ。僕は君の孤獨な骨についての傳説を作る。どこかのアラ  
 ビヤ人が戦争で名高い沙漠の中の沃地オアシスで君の骨を見つけ出して、誰が此骨のぬ  
 しを愛したかと語り合ふ筋にする。それから、僕があの人にそれを讀んで聞か  
 せる、あの人少し泣くかも知れない、さうすると僕がその代りに勇士の光榮  
 を讀んで聞かせる、いかにそれが我等のまぼろしの間の戀に優つて——

客。お待ちなさい、あなたはまだあの人に紹介されたことはない筈ですが。

詩人。そんなことは些細なこと、些細なことです。

客。どうもあなたは僕の軀に敵の槍が突つ通されるのを馬鹿に急いで待つてるや

うに思はれる。しかし、何にしても、先づ帽子を取つて來ます。

詩人。君に願ひする、美しい戦争と貴い行爲と遂げられない目的との名に依つ  
 て願ひする、無情な處女に聞かしても聞かされ甲斐もない戀物語の名に依つ  
 て願ひする。美しい琴絲が切れたやうに傷つき破れた心の名に依つて、君に  
 願ひする。ロマンスの古めかしい聖い名に依つて君に願ひする。そのベル  
 を鳴らしなさんな。

(客、ベルを鳴らす)

詩人。(がっかりして腰かける) 君は結婚する。君は時々妻君とパリイぐらゐまで遊山  
 に出かける、カンヌぐらゐまで行くかも知れぬ。それから家族が殖える、それ  
 がだんだん大きくなつて、末は眼も届かないやうに殖え擴がつて行く——僕は  
 誇張法ハイパーボライで云つてるのだ——君は金をまうけて家族を養つて、それで一般の世間  
 とおなじになる。君の記念には何の碑も立てられない、その代り——

(僕一人戸口に出てくる。客小聲で何か云ふ。戸口から内に入る)

詩人。(立ち上がり、手を翳げて)

「此處にも時満ちてロマンス生れしが、若くして死す」と。(詩人腰かける)

(労働者と店員及び巡査來る。ピアノの音止む)

巡査。何かまちがひがありましたか?

詩人。何もかも間違つてゐる。ロマンスを殺さうとしてゐる。

巡査。(労働者に)此紳士はどこかちいつと變だね。

労働者。今日はみんなが變なのだ。

(音樂再び聞える)

詩人。あゝしまつた! 二人奏曲だ。

巡査。どこか變だね。

労働者。もう一人の方ほうも見せて上げたかつたよ。

(幕)

## 金文字の宣告

金文字の宣告 (二幕)

人

王

侍従長

豫言者の長

少年

少女

間諜等

第一の豫言者

第二の豫言者  
 第一の衛兵  
 第二の衛兵  
 外國の旅人  
 從者等

所

ゼリコンの王宮の正門前

時

バビロンの滅亡より少し前

(衛兵二人往つたり來たりする、やがて立ちどまり、門の兩側に一人づゝ立つ)

第一衛兵。ひどく暑い日だ。

第二衛兵。ギシヨンの河の、木の實の熟つた樹のかげの、涼しい側を泳ぎたいな。

第一衛兵。かみなりが鳴り出すか、それとも何處ぞの王の家が没落しさうな日だ。

第二衛兵。日がくれたら涼しくなるだらう。陛下は何處においでになる？

第一衛兵。陛下は外國の大使たちと金の船をのり廻してをられるか、それとも將來の戦争のことで武官たちとないしよ談をしてをられるのだらう。どうか星の運が好ければよいが！

星の運がよければとは、どういふわけだ？

云へば、もし星から不意に王の御身にわざはひが來るとすれば、人民から王の周圍全體までもかゝるのだ、その王の宮殿

これ、山から猿が出て来たりあら野から大きな獣がやつはそこに王が住んでゐたといふことさへ分からなくなつてし

第二衛兵。併しどうして星の災禍わざはひが我が王の御身にかゝるだらう？

第一衛兵。なぜといへば、それは陛下がめつたに星の機嫌なんぞお取りなさらな

いから。

第二衛兵。うん！ さういふ話は俺もきいてゐる。

第一衛兵。星といふものは人間が馬鹿にして濟むものだらうか？ かみなりも疫病も地震も支配してゐる星がさういふ災禍わざはひをむやみと下さずにくれるのは、人間の祈りのためぢやあるまいか？ 外國の使臣たちは始終王の許に出入りする、遠國から歸つて来た大將たちも、國々の知事たちも、法律の博士たちも、みんな出入りする、しかし、星の祭司たちばかりは決して出入りしない。

第二衛兵。おや！ かみなりぢやないか？

第一衛兵。きつと、星が怒つてゐるのだらう。

(外國の旅人来る。うろろみ見廻しながら王宮の大門の方へ近づいて来る)

衛兵等。(旅人の方に槍を向けて) さがれ！ さがれ！

旅人。なぜですか？

第一衛兵。王宮の御門に手を觸れれば死罪だ。

旅人。わたくしはセサリイから来た旅人です。

第一衛兵。外國人にしても死罪だ。

旅人。ひどく神聖な御門ですな。

第一衛兵。觸れれば死罪だ。

(旅人歩み去る。二人の子供等手をひき合つて来る)

少年。(衛兵に) 王様にお目にかゝつて輪を下さいつてお願いしたいんだけど。

(衛兵微笑する)

二五八

少年。(門を押す。少女に) あからないよ。(衛兵に) 王様の御門にお願ひしても、王様にお願ひするのとおんなじだらうか?

衛兵。うん、おんなじだとも。(他の衛兵の方に向いて) 誰か見えるか?

第二衛兵。(手をかざして) 犬が見えるつきりだ、それも野の方に遠くに見える。  
第一衛兵。それぢやあ、ちつとのあひだしやべつて、パツシでも食はう。

(衛兵等革囊から小さいパツシを指でつまみ出して現代の世にない其藥品を口に入れる)

少女。(指さしながら) うちのお父さんはあの人より最つと背の高い軍人さんよ。  
少年。僕のお父さんは字が書ける。僕にも教へてくれた。

少女。そちう! 字を書いたつて誰も怖がりやしないわ。うちのお父さんは軍人よ。

少年。僕は金の塊かたまりを持つてるよ。ギシヨンに流れ落ちる小川で僕が見つけ出した

んだ。

少女。あたしは詩を知つてるわ。それはあたし自分の頭の中から見つけ出したのよ。

少年。長い詩かい?

少女。いゝえ。最つと長くしたかつたんだけど、もうなんにも空そらのことで云ふことがなくなつてしまつたのよ。

少年。なんていふんだい?

少女。むらさきの鳥

そらへ向つてのぼる

上に上にと

まはりまはりどぶ。

少年。その鳥が死んでしまつた。

二五九

少女。それぢや調子がわるいわ。

少年。調子なんざあ、いゝよ。

少女。あたしの詩はいゝと思つて？

少年。鳥はむらさきぢやない。

少女。あたしの鳥はむらさきだつたのよ。

少年。へええ！

少女。あら、あたしの詩が氣に入らないんでせう！

少年。うゝん、氣に入つたよ。

少女。いゝえ、氣に入らないのよ。きつと變てこだと思つてるのよ。

少年。うゝん。そんな事は思つてやしない。

少女。いゝえ、思つてるのよ。そんなら、なぜあの詩が好きだつて云はなかつた

の？ あたしがたつた一つ作つた詩なのよ。

少年。好きだよ。大好きだよ。

少女。嫌ひなのよ。嫌ひなのよ！

少年。怒らなくなつていゝよ。僕がその扉の上にその詩を書いて上げよう。

少女。書ける？

少年。うん、書けるとも。お父さんが僕に教へてくれた。この金塊で書いて見よ

う。鐵の扉だから金色の字が書けるだらう。

少女。ぢや、ほんとに書いて頂戴ね！ ほんとの詩のやうに書けたところが見た

いわ。

(少年かき始める。少女見てゐる)

第一衛兵。ねえ君、俺たちはぢつき又戦争に行かなくつちやならないね。

第二衛兵。なあに、ほんのちよつとした戦争だ。相手が山國の奴等ぢや何時だつ

てほんの小ぜりあひさ。

第一衛兵 人間が戦争に行く時には、自分の眼と未来との中間あひだに垂れ下がつてゐる神々の幕がふだんよりも厚くなる、大きな戦争に行くのか小さな戦争に行くのか、そんな事が分かるものか。

第二衛兵 山國の奴等ぢや小さな戦争よりほかあるまい。

第一衛兵 しかし、時々には神々が笑ひなさるだろ。

第二衛兵 だれを？

第一衛兵 王様たちをさ。

第二衛兵 なせ君はこの山國の戦争について不安になつて來たんだ？

第一衛兵 なせと云へばね、陛下は陛下の御先祖がたのどなたよりも力強くなられた、そしてどなたよりも多くの兵士と、馬と、富を持つてをられる、その富は陛下の父君と祖父君のために賠償金を拂つて、その妃方や姫君たちに財産をわけてやつても十分過ぎるほど澤山あるのだ。そして毎年毎年陛下の鑛夫たち

がオバルの鑛山やまやトルコ石いしの石山やまから持つて來るものは殖えるばかりだ。陛下は實に力つよくなられた。

第二衛兵 そんなら、なほのこと、ほんの小さい戦争で山國やまくにの奴等を壓しつぶしてしまふだろ。

第一衛兵 國王がひどく強大になる時、空の星がその王を妬む。

少年 僕は君の詩を書いちやつた。

少女 あら、ほんとに書いたの？

少年 書いたよ。読んで上げよう。(讀む)

むらさきの鳥

空へ向つてのぼる

上に上にと

まはりまはり飛ぶ。

それが死んでしまつた。

少女。それぢや調子が悪いわ。

少年。そんな事はいしや。

(一人の間諜滑かに入場、舞臺を通過して出て行く。衛兵等はなし止む)

少女。あの人は怖い人ね。

少年。あれは王様の間諜さ。

少女。あたし、王様の間諜は嫌ひよ。怖いわね。

少年。ぢや行かう。逃げつちまはふ。

衛兵。(再び子供等に心付いて) あつちへ行け、あつちへ行け 王様がおいでになる、

お前たちは食はれちまふぞ。

(少年は衛兵に石を投げつけて驅け去る。また別の間諜入り来て舞臺を横ぎる。更に第三の間諜入り来り、門の扉を見る。扉を熱視した後、鼻の聲を真似た口笛を吹く。第二の間諜歸つて来る。二人とも無言)

二人で口笛をふく。第一の間諜来る。一同扉を検査する。王及び侍従長入場。王は紫の上着を着てゐる。衛兵等手ばしこく槍を左の手に持ち換へて右の手を右側に戻す、それから槍の尖を地から一寸ぐらゐのところまで下ろして、同時に右の手を頭の上まで上げる。暫時その姿勢で立つ。それから右の手を右側に垂れて、同時に槍を上げる。次の動作は其槍を右の手に取り、前に在つた通りに槍の臺尻を床に下ろす、槍は少し前方に傾いてゐる。二人の衛兵は同時に同様に動く)

第一間諜。(忙しく王の前に進み跪いて、床に額をすりつける) 鐵の扉どに何事か書いてございます。

侍従長。鐵の扉どに!

王。何處かの馬鹿者がやつたことであらう。昨日きのうから今までに誰が此處へ来た?

第一衛兵。(槍にかけた手を少し上にあげて槍を身近く寄せ、同時に體をくつつける、それから右足で一歩退き、右の膝で跪く、これだけの事をやつてから口を開く、その前ではいけないのである)

陛下、誰もまゐつた者はございません、たゞ、セサライからの旅人がまゐりまし

た。

王。そのものは鐵の扉に觸つたか？

第一衛兵。いえ、觸りません、觸らうと致しましたが、わたくし共が追ひ拂ひま  
してございます。

王。どのくらゐ近くまで來たか？

第一衛兵。我々の槍の邊までまゐりました。

王。どういふ目的があつてこの鐵の扉に觸らうとしたのだらう？

第一衛兵。それは私には分かりません。

王。何方の方へ行つた？

第一衛兵。〔左手を指す〕 一時間ほど前、あちらの方へまゐりました。

〔王は間諜の一人に囁く、その男は地面を檢べて見て、それからさうつき立ち去る。衛兵立ち上がる〕

王。〔居残つた二人の間諜に〕 此處には何と書いてある？

間諜。陛下、わたくしどもには字を読むことは出來ないのでございます。

王。すぐれた間諜は何でも出來なければならぬ。

第二間諜。陛下、私どもは見張りをいたし、穿鑿もいたします。私どもは影を讀  
み、足跡を讀み、隠れたる場所のないしよ話もよみ解きます。しかし、私ども  
は文字を読むことは出來ないのでございます。

王。〔侍從長に〕 何のことか讀んでくれ。

侍從長。〔近寄つて讀む〕 陛下、反逆でございます。

王。讀め。

侍從長。むらさきの鳥

空へ向つてのぼる

上に上にと

まはりまはり飛ぶ。

それが死んでしまつた。

第一衛兵。(小聲で) 星のおつげだ。

王。(衛兵に) セサリイの旅人のほか誰ぞ此處に來たものはなかつたか?

衛兵。(前の如く跪き) 誰もまゐつたものはございません。

王。何も見なかつたか?

第一衛兵。何も見かけませんでした、たゞ、野の方に遠く犬が一疋と、

衛兵の子供等が遊びにまゐつたばかりでございます。

王。(第二の衛兵に) お前も見なかつたか?

第二衛兵。(跪き) 陛下、何も見かけませんでした。

侍従長。不思議だ。

王。何か秘密の前知しらせであらう。

侍従長。叛逆でございませう。

王。星の知らせであらう。

侍従長。いえ、いえ、陛下。星からではございません。誰か人間のいたした事で

ございませう。併しとにかく、此意味をよみ解かせなければなりません。星の

豫言者どもを呼び寄せませうか?

(王は間諜を呼ぶ。間諜等王の前に走り出る)

王。たれか豫言者を探して來い。(間諜去る) 侍従長、わしが思ふに、世界無比のこのゼリコンの宮殿のうねりくねつた道を歩くことも、金の球の遊戯をすることも、もう止めにしなければなるまい。わしは今まで星のことよりは我が民のこととを餘計に考へて居つた、風の吹く天のことよりはゼリコンのことを餘計に考へて居つた。

侍従長。陛下、これは必らず何處ぞの閑人がいたづら書きして行つたものでございませう。陛下の間諜どもがその男を見つげ出すに極まつてをります。そして

そんな者の名も直きに忘れられてしまふでございませう。

王。左様、左様。お前の云ふことが正しいかも知れぬ。衛兵等は誰も見かけなかつたと申し居るが。疑ひもなく乞食か何ぞのした事であらう。

侍従長。左様でございます。きつと乞食がいたした事でございませう。しかし御覧なさいませ、星の豫言者が二人まわりました。あの者どもはこれがいたづら書きであると申すでございませう。

(二人の豫言者入り来る、少年一人その後に従ふ。一同叮嚀に王に禮をする。二人の間諜忍んで入り来り舞臺の後方に立つ)

王。乞食か何かと鐵の扉びらに詩を書いて行つた、詩の道はお前たちがよく知つて居ることだから、わしはお前たちに、豫言者としてよりは詩人として、この詩に何か意味があるかどうか、聞きたいと思ふのだ。

侍従長。ほんのつまらぬ詩なのです。

第一豫言者。(再び王に禮して扉の前に近づく。文字を見る)星の使たちの僕、こちらへ。

(従者の少年近寄る)

第一豫言者。わしどもの黄金の上衣うはぎを持つて来てくれ、これは或ひは喜びごとであるかもしれぬ、それから、緑の上衣も持つて来てくれ、或ひは此文字は、星がふと我が王を悦ばせる爲にうらわかい新らしい美しいことを告げてゐるのかも知れぬ、それから黒の上衣うはぎも持つて来てくれ、或ひは又恐ろしい宣告おっげであるかも知れぬ、(少年退く、豫言者は扉の前に進み嚴かに讀む)星のお言葉でございませう。

(少年上衣を持つて再び入場)

王。何處かの乞食が書いたものに相違ない。

第一豫言者。純金で書かれてございます。(豫言者は黒の上衣を取つて頭から全身を包む)

王。星がどういふ事を云つてゐる？ どういふ知らせか？

第一豫言者。私には申上げられません。

王。(第二の豫言者に) それではお前が読んで、どういふ意味か聞かしてくれ。

第二豫言者。(扉の前に進み讀む) 星のお言葉でございます。

(彼も黒衣に身を裝ふ)

王。何のことか? どういふ意味か?

第二豫言者。私どもには分かりません。たゞ星のお言葉でございます。

侍従長。ほんのつまらぬ事でございます。陛下、これには何の意味もございません

まい。鳥も死ぬだらうではございませんか?

王。なぜ豫言者どもは黒の上衣を着たのか?

侍従長。あの者どもは特別の人たちでございます。物の裏面を探るのでございま

す。別に何の心配もございません。

王。黒の上衣うはぎを着てゐる。

侍従長。あの者どもは何も悪い事は申しません。何もまだ申しません。

王。もし人民がこの豫言者たちの黒衣を着てゐるのを見たら、星がわしに反対し

たのだと云つて、わしの運が傾きかけたものと信ずるであらう。

侍従長。人民に知らせてはなりません。

王。どの豫言者か此宣告を解き聞かせてくれねばならん。星の豫言者の長かしらを呼べ。

侍従長。(左の出口の方に行き)ゼリコンを守る星の豫言者の長かしらを呼べ。

聲。(離れたところで) 星の豫言者の長かしら、星の豫言者の長かしら。

侍従長。陛下、星の豫言者の長を呼びましてございます。

王。もし彼が正しい説明をしてくれたら、わしは鑛山やまから採つたオパールを交ぜた

トルコ石の頸飾りを彼の頸にかけてやらう。

侍従長。彼は間違ひはいたしませんまい。甚だ巧者な説明者でございますから。

王。もし彼もまた、黒い大きな上衣を身にまとふてわし共に何も云はず獨言を云

つて首を垂れて行つてしまひ、我々の恐怖が衛兵にまで傳はつて、彼等が大聲

に叫ぶ如きことになつたら、どうしたものか。

侍従長。これは決して星の宣告おつげではございません。誰か氣まぐれの學者が自分の持つて居ります金を無駄にして、不作法にも鐵の扉に書きつけてまゐつたものでございませう。

王。わしは自分自身の爲に最後の宣告を恐れるのではない、決してわし自身のためではない。わしは寒い風の吹く瘠せた山國を親から傳へ受けたが、多年の平和に依つて國を富まし、多年の戦争に依つて領地を擴めた。わしは不毛の地から收穫を得、人氣の惡かつた都市に法律を興へ、我が民は幸福になつた。然るに、星が怒つてゐる！

侍従長。陛下、星ではございません、星ではございません、星の豫言者も説明をいたしませぬから、きつと何處ぞの惡戯者が自分の金を無駄にいたしたのでございませう。

(此間にゼリコンを守つてゐる星の豫言者の長入り来る)

王。ゼリコンを守る星の豫言者の長かしら、向うの扉びの上の詩を説明して貰ひたい。

豫言者の長。(月の前に進み讀む) 星の御言葉でございます。

王。説明してくれ、その禮には、大きなトルコ石に、雪の深い鑛山やまから採つたオパールを交せて、お前の頸を飾らう。

豫言者の長。(ほかの豫言者と同じく大きな黒衣を以て身を覆ふ) この國の中に、王ならずして誰か紫を着る者がありません、神代ながらの星の奉仕まつりをおろそかにして星の心を痛ましむるもの、即ち空に向つて上ぼるものであります。斯かる人が力と富を増して高く高く上ぼります、斯かる人が己が祖先の王冠よりもより高きところを望んで上ぼります、斯かる人に星は罪の宣告を興へました。永遠の尊き星が宣告を興へました。

(沈黙)

王。何者が書いたのであらう？

豫言者の長。純金で書かれています。神々の一人が書かれたのでありませう。侍従長。神が？

豫言者の長。永遠の星の中に住みたまふ神の一人が書かれたのでありませう。

第一衛兵。(第二衛兵に小聲で)昨夜おれは星が一つ光りながら地に墜ちるのを見た。

王。これは何かの知らせか、それとも最後の宣告か？

豫言者の長。星のお言葉でございます。

王。それでは最後の宣告であるな？

豫言者の長。星のお言葉は冗談ではございません。

王。わしは大なる王であつた——星が彼を滅した、星は彼の最後の宣告に神を遣はした、と歴史に云つて貰ひたい。わしは諸王の中にも自分に匹敵する者を見出さぬから、人間が自分を滅ぼさうとは思はぬ。又わしは自分の民を虐げたこ

とはないから、人間がわしに反対して起たうとは思はぬ。

豫言者の長、人間に對して善事を行ふよりも星を禮拜する方がよりよい事でございます。たとへ我々の敵は悪を行はふとも、その敵に對して尊大であるよりは神々の前に身を卑しくする方がよりよい事でございます。

王。もし今でもまだ星が聞いてくれるなら、わしは子供を星に捧げよう——まばたく星に女の兒を捧げ、まばたかぬ星に、動かない眼の星に、男の兒を捧げよう。(間諜等に)生贄の男兒と女兒を連れて來させよ。(間諜の一人は足跡を見ながら右手

へ退場)星の御使の神に此生贄を捧げることをお前は許してくれるか？

豫言者の長。星及び星の御使の神々に捧げられる生贄をわたくしは止めることはいたしません。(他の豫言者たちに)供物に用ゐる小刀を用意なさい。

王。生贄は星の御使の神が踏まれた鐵の扉の前で捧げるか？ それとも聖殿に於てするか？

豫言者の長。鐵の扉の前でなさいませ。(他の豫言者たちに) 供物の臺石を此處へ持つておいでなさい。

(鼻の聲の口笛右手の方に聞える。第三の間諺その方に這ふやうにして囀けつける)

王。この捧げ物で災禍を取り止めることが出来ようか？

豫言者の長。それは誰にも分りません。

王。これでもなほわざはひは下るかも知れぬ。

豫言者の長。もつと大きいものを捧げになるのがよろしうございませう。

王。人間がこれより大きいものを捧げ得ようか？

豫言者の長。それは人間の慢心でございます。

王。慢心？

豫言者の長。空に向つて高くのぼり星の心を痛めた陛下の慢心でございます。

王。わしの慢心をどうして星に捧げられる？

豫言者の長。陛下のその慢心の上こそ最後の宣告がくだり、陛下の王冠が取り去られ、陛下の王國も奪ひ去られるのでございます。

王。然らばわしは我が王冠を捧げものにして無冠のまゝで國を治めよう。さうもしたらば、我が王國だけでも救ひ得られよう。

豫言者の長。もし陛下が陛下の御誇りになされますその王冠をお捧げなされ、もし星がその捧げ物を受け納れられましたら、星の遣はされました神も彼の宣告を取り消され、陛下が、たとへ卑しくされ無冠の儘にしても、なほ此王國を治められることをお許しなさるかも知れません。

王。然らばこの王冠を香料と香を以て焼かうか、それとも海へ投げ入れようか？  
 豫言者の長。神が來つて彼の金文字の宣告を書かれました此鐵の扉の前にお置きなさいまし。再びその神が夜の間に来り此市を揉み潰さうとするか或ひは此鐵の扉から敵を導き入れようとする時、陛下の捨てられた慢心を認められ、その

供物を受け納れて、忘れられてゐた星の許にお持ち歸りになるかも知れませ  
ん。

王。(侍従長に)

間諜どもを追ひかけて、もう生贄は不要だと云つてくれ。(侍従長

右手に退場。王は自分の王冠をぬぐ) さらば、わが脆き光榮よ。諸王はお前を求め  
た。星はお前を妬んだ。(舞臺暗くなる)

豫言者の長。星をさまたげる太陽はすでに沈み、一人の神も地を歩みたまはぬ晝  
は終りました。靈と、肉眼に見えぬ凡てのものが地を迷ひ歩く時刻は近寄りま  
した、守護の星の御顔が野の上に現はれる時も近うございます。王冠を其處に  
お置きなさいませ、私どもはこの場を立ち去りませう。

王。(鏡の扉の前に王冠を置き、それから衛兵に云ふ) さがれ！ 今夜ひと晩、だれも此扉  
に近づけてはならぬぞ。

衛兵等。(跪いて) かしこまりました。

(衛兵等は王がぬくなるまでなほ跪いてゐる。王と豫言者の長と歩み去る)

豫言者の長。これこそは陛下の御誇りでございました。お忘れなさいませ。星よ  
願はくは受けたまへ。

(左手に退場)

(衛兵等たち上がる)

第一衛兵。星が王を妬んだのだ！

第二衛兵。古い王冠であつた。陛下はあの王冠を辱しめなかつた。

第一衛兵。星も受け入れるであらう。

第二衛兵。もし星がこの捧げ物を受けないとしたら、どういふ運命が陛下の御身  
に來るだらう？

第一衛兵。それは突然に何か起つて、此ゼリコンといふ市も此扉の前に立つ君も  
俺もまるで跡かたもなくなつてしまふのだらう。

第二衛兵。 どうして！ どうしてそれが君に分かる？

第一衛兵。 それがむかしも今も神々のなされ方だ。

第二衛兵。 併しそれは不公平だ。

第一衛兵。 神々がそんな事を知るものか？

第二衛兵。 今夜そんな事が起るだらうか？

第一衛兵。 さあ！ 俺たちは此處を退却だ。

(衛兵等右手に退場)

(舞臺次第に暗くなる。右手より侍従長再び入場、舞臺を通つて左手に退場。右手より間諜等入場、舞臺を通り過ぎる、その時舞臺は殆ど眞暗である。)

小兒。(右手より入場、白衣を着て、兩手を少し伸ばしながら云ふ) 王様の扉、王様の扉、小さい輪を下さす。(小兒王の扉の前に行く。王冠を見つけて満足したやうな調子でいふ) やああ！

(小兒王冠を取り上げて又それを地に置き、それから笏を以て打ち廻しながら、来た方の路へ出て行

く)

(門の大戸内部より開かれる。内にあかりが見える、こそこそ間諜一人忍び出る、王冠のなくなったのを見つめる。もう一人の間諜忍び出る、二人の低く下げた頭は殆ど一つに接し合ふ)

第一の間諜。(しゃがれた唾き聲で) 神たちがあいでになつた！

(二人大戸から驅け込む、扉は閉される。扉再び開かれて王と侍従長が出て来る)

王。 星は満足なされた。

(幕)

旅宿の一夜

旅宿の一夜

(一幕)

人

スコット・フォルテスク (通稱トッフ) 紳士のなれの果

ウイリアム・ジョーンズ (通稱ビル)

アルバート・トーマス

ジエームス・スミツス (通稱スニツガース)

クレツシの第一の僧

クレツシの第二の僧

クレツシの第三の僧

クレツシ

船乗

宿屋の一室のさしこもりにて暮あぐ

スニツガースとピル兩人はなしをしてゐる。トツフは新聞を読んでゐる。アルバート少し離れて腰かけてゐる。

スニツガース。ぜんたい、どうする氣だらう？

ピル。あれが知るものか。

スニツガース。何時まで俺たちを此處へひつぱつとく積りだらう？

ピル。もうこれで三日此處に泊つてる。

スニツガース。此處へは人の子ひとり來やしねえ。

ピル。あの男が此宿を借りたおかげで俺たちの懐中も大分痛められちやつた。

スニツガース。何時まで此處を借りとくんだらう？

ピル。そんなことが分かるものか。

スニツガース。さびしいとこだなあ。

ピル。おいトツフイ、お前何時まで此宿を借りたんだ？

(トツフは遊技の新聞をよみ續けて、何をいはれても知らない顔をしてゐる)

スニツガース。あきれたトツフだなあ。

ピル。あれでもあいつは智者なんだ。

スニツガース。智者に限つてどちをやりやがる。もくろみだけはうめえんだが、其もくろみがものにならねえんだ、智慧のある奴が失敗つたとなりや、俺やお前よりにつちもさつちもいかなくなる。

ピル。ふん！

スニツガース。おらあ斯んな處はきれえだ。

ピル。どうして？

スニツガース。なんだか不氣味ぢやねえか。

ビル。あの男が俺たちを此處に止めとくのは、あの黒んぼの奴等に嗅ぎつけられねえためさ。あの三人の異人の坊主めが一生懸命おれたちを探してゐやがる。早く行つてルビイを賣つてしまひたいな。

アルバート。心配しなさんな。

ビル。なぜだ、アルバート？

アルバート。俺がね、あの黒い悪魔の奴等をハルで賣いてしまつた。

ビル。まいちまつた？

アルバート。賣いてやつた、三人とも。額に金の點せきをつけてるあの奴等を。その時は俺がルビイを持つてゐた、そこで、奴等をハルでごまかしちまつた。

ビル。どういふあんばいしきにやつつけない？

アルバート。俺がルビイを持つてゐると、奴等が俺のあとを追つかけて來やがつた——

ビル。お前がルビイを持つてゐるつて奴等に誰が教へたらう？ お前が見せたわけでもあるめえ？

アルバート。なんの—— まあ、つまり嗅ぎつけたんだな。

スニツガース。嗅ぎつけた？

アルバート。うん、持つてゐれば、こいつが持つてるなと奴等に分かるんだ。それで、俺の跡をつけて來やがつた。巡查にさういつていつとけると、あんな貧乏くさい黒んぼが三人ばかりで何をやるものかつて巡查はいひやがる。あゝつ！ あらあ奴等がマルタでかはいさうなジムの奴をどんなめに遇はしたかと思ふとたまらなくなる。

ビル。さうよ、俺たちが出立前たつぱへにボンベイでデョーシをやつつけやがつたし、スニツガース。あゝつ、いやだ！

ビル。なぜ奴等を警察でつかまへさせなかつたんだ？

アルバート。ルビイの一件がどうなると思ふ？  
 ビル。なるほど！

アルバート。先づ、俺はそれよりは最うちつとうまくやつたぞ。俺はハルの町を往つたり來たり往つたり來たりした。思ひつきりゆつくら歩いた。それで横町を曲がると駆け出すんだ。横町さへ見れば俺は曲がった。だが、奴等をごまかす積りで曲がらない横町もあつた。まるで兎みたいに駆けずり廻つた。それから坐りこんで待つて見た。が、坊主は來なかつた。

スニツガース。なんだと？

アルバート。額の上に金の點はしをくつつけた異人のくろんぼの悪魔はたうとう來なかつた。俺がすつかりまいてしまつた。

ビル。うまくやつたなあ。

スニツガース。(満足の溜息をして)なぜ俺たちに聞かせなかつたんだ？

アルバート。だつてトツフが俺たちに口をきかせねえからさ。あの男は何か好い工夫を考へてゐて俺たちを馬鹿だと思つてるんだ。なんでもあの男の思ふやうに物事が運ばなくつちやならないんだ。そのあひだに、俺は奴等をまいてしまつた。もし俺が奴等をハルでまかなかつたとしたら、もう疾うにあの三人の中の一人がトツフの體に曲がったナイフを突つ通してしまつたかも知れねえ。

ビル。うまくやつたよアルバート。

スニツガース。トツフイさいたか？ アルバートが奴等をまいてしまつたとさ。

トツフ。うん聞いてる。

スニツガース。それで、お前それをどう思ふ？

トツフ。うん——アルバートうまくやつたな。

アルバート。それで、お前は、どうするつもりだ？

トツフ。待つてる積りだ。

アルバート。何を待つてる積りだらう？

スニツガース。不氣味なとこだなあ。

アルバート。ビル、馬鹿げたはなしぢやないか。金はなくなるし、ルビイは賣らなまやならねえし。どこか町へ行かうぢやねえか。

ビル。あの男が行くまい。

アルバート。ぢや、置いてかう。

スニツガース。ハルに近寄らなけりや大丈夫だ。

アルバート。ロンドンへ行かう。

ビル。だがあの男も割前が欲しいだらう。

スニツガース。そりやいゝとも。たゞ早く出かけてえ。(トツフに向つて)

出かけようと思ふ、ルビイを渡してくれ。俺たちは

トツフ。承知だ。

(トツフはチヨツキのポケットからルビイを出して彼等に手渡しする。ルビイは小さい鷄卵ぐらゐの

大きさである)

(トツフは新聞をよみ續ける)

アルバート。スニツガース、出かけよう。

(アルバートとスニツガース出て行く)

ビル。あにき、左様なら。お前にもちやあんと割前はやる。此處ぢや何も仕事はなし、女はゐず、酒屋はなし、ルビイは賣りたいし、だからな。

トツフ。ビル、俺は馬鹿ぢやない。

ビル。どうしてどうして、馬鹿ぢやないとも。もちろん、馬鹿ぢやない、お前もいろ／＼骨を折つてくれた。左様なら。左様ならとかなんとかいはないか？

トツフ。うん、いふとも、左様なら。(まだ新聞を讀んでゐる。ビル出て行く)

(トツフ短銃を自分の傍のテーブルに載せ、それから新聞を讀む)

スニツガース。(息を切つて入り来る) トツファイ、歸つて来た。  
トツフ。歸つて来たか?

アルバート。トツファイ、奴等はどうして此處へ来たらう?

トツフ。そりや歩いて来たんだらう。

アルバート。だつて八十哩あるぜ。

スニツガース。トツファイ、奴等が此處へ来たつてえのをお前知つてたのか?

トツフ。今ごろ来るだらうと思つてた。

アルバート。八十哩。

ビル。トツファイあにき——どうしよう?

トツフ。アルバートに聞いて見ろ。

ビル。やつらがこんな真似をやるやうぢやお前よりほかに俺たちを助けてくれる者はない。トツファイ——お前が智慧者だつてことは俺は前から知つてゐた。も

う俺たちも馬鹿な真似はしない。お前のいふ通りにする。

トツフ。お前たちは中々強くつて力もある。あの像の頭からルビイの眼を盗み出さうてえ奴はたんとはあるまい、おまけに、あんなおつかない顔つきの像で、

あんな夜と来ちや。お前たちは強いよ、ビル。だがお前たち三人とも馬鹿だ。

ジムは俺のいふことなんぞ聞かないと云つたが、ジムは今何處にゐる? それから、ジョージも。あの男たちはどうされた?

スニツガース。トツファイ、もう其ことは云つてくれるな!

トツフ。まづ、そこで、お前たちの強いのも役に立たないとなる。お前たちは智慧が入用だ。でなければ、奴等はジョージとジムをやつつけた通りにお前たちもやつつける。

一同。あゝつ!

トツフ。あの黒んぼの坊主どもは、像の眼の玉を取り返すまでは、何年かゝらう

と、世界を輪にめぐつてもおれたちの後を追つかける。もし俺たちがそれを持つた儘で死んだら、俺たちの孫子の代まで追つかけるだらう。ハルの町で市街ごせうの三つも駆け廻りや、さういふ奴らをまいてしまへると、そこのお馬鹿さんは愚つてゐる。

アルバート。だつてお前だつて逃げられねえぢやねえか、やつらが最う此處まで來てゐるとすると。

トッフ。かういふ事だらうと俺は察してゐた。

フアルバート。察してゐた！

トッフ。さうさ。社交界の新聞に廣告も出ちやゐないが、俺はあの連中を特に接待するつもりで此別荘を借り受けたのだ。下を掘ればいくらでも場席はある、場所もよし、殊に一番肝心なことは隣近處に家がないことだ。そこで、俺は此午後は御在宅で諸君を待つてゐるんだ。

ビル。ふうん、お前は利口だなあ。

トッフ。忘れちやいけない、お前たちと死との中間あひだには俺の智慧があるばかりだぞ。お前たちのくだらない策略を持ち込んで教育を受けた紳士の立派な計畫のぶちこはしをするな。

アルバート。お前が紳士なら、こちとらのやうな仲間にならないで紳士の仲間へえりや好いぢやねえか？

トッフ。俺はあいつらの仲間にあつと利口過ぎるのさ、お前たちの仲間にあつと利口過ぎるとほり。

アルバート。紳士の仲間にあつと利口過ぎる？

トッフ。俺はまだ骨牌で負けたことがないんだ。

ビル。骨牌で負けたことがない？

トッフ。金にかけてさへあれば。

ビル。なるほど。

トッフ。一つボーカアをやらうか？

一同。たくさんだ。

トッフ。ぢや、いはれた通りにするがい。

ビル。分かつたよ、トツファイ。

スニツガース。今なんだか見えなやうだ。窓掛を下げようか？

トッフ。いゝや。

スニツガース。いけないか？

トッフ。窓掛は下げずとい。

スニツガース。さうか。

ビル。併し、トツファイ、向うから此方が覗けるぜ。敵に覗かれるつてことは禁物だ。俺には分らないが――

トッフ。ふん、お前には分かるまいとも。

ビル。分かつたよ、トツファイ。

(一同短銃を引出す)

トッフ。(自分の短銃を傍に押しやる)ピストルは無用だ。

アルバート。どうして？

トッフ。俺の御馳走中に物音をさせたくないんだ。音がすれば、呼ばれないお客まで来るかも知れない。ナイフは別のはなしだ。

(一同ナイフを出す。トッフは一同にまだ出すなと命ずる。此時トッフは既にルビイを取り戻してゐる)

ビル。トツファイ、来たやうだ。

トッフ。まだだ。

アルバート。何時来るだらう？

トツフ。俺が奴等を引受ける仕度が出来れば来る。それまでは、来ない。

スニツガース。早く済んじまへばいいがなあ。

トツフ。早く済ませたいか？、ちや今始めよう。

スニツガース。今？

トツフ。今だ。いゝか聞いてくれ。俺のいふ通りにやるんだぞ。お前たちはみんな外に出て行く真似をしろ。俺がやつて見せる。ルビイは俺が持つてゐる。俺一人と見れば奴等は像の眼玉を取り戻しに来る。

ピル。だが、どうして奴等に俺たちの中の誰が持つてゐるか分かるだらう？

トツフ。どうして分かるか俺にも分からないが、どうも奴等には分かるらしい。

スニツガース。やつらがはいつて来たら、お前どうする？

トツフ。俺はどうもしない。

スニツガース。なにっ？

トツフ。奴等は俺のうしろにそうつと忍んで来るに違ひない。そこで俺の友人のスニツガースとピルと、それから奴等を一度まいたといふアルバートが、どうにかしてくれるだらう。

ピル。分かつた、トツファイ、安心しなさい。

トツフ。もしお前たちがちいつとでも手のろけりや、ジムの崩御の時の通りの愉快なお芝居がまた見られるんだ。

スニツガース。トツファイ、もうあの事はいひつこなしだ。俺たちは大丈夫やつつける。

トツフ。よし、よし、ちやあ、俺のやりくちを見てゐろ。

(トツフは窓の前を通り過ぎて奥の室に通ずる右手の戸口に行き、その戸を内部に開く。それから、その開いた戸に隠れて這つてゐて室内にゐながら外に出たやうに見せて戸を閉める。彼は他の三人に合圖する。三人のみ込む。彼は前と同様の仕方て室にはいつて来る風をする)

トツフ。斯うやつて俺は戸の方に後を向けて腰かける。お前たちは一人一人出て行くやうに見せかけるんだ。なりたけ低くしやがんで向うの側へ行け。憲から見られちやいけな。 (ビル出て行く真似をする) わすれてもピストルは無用だ。警察といふものは心配性に出来てるからな。

(他の二人ビルの後に行く。三人とも右手の戸の内部にしがむ。トツフはルビイを自分の傍のテーブルに載せる。烟草に火をつける)

(後方の戸極く静かに、何時開け始めたか分からぬぐらぐらゆつくり開く。トツフは新聞紙を取り上げる)

(印度人一名、椅子にかくれながらそろりそろりさ床を這つて来る。彼はトツフのゐる左方に動いて来る。三人の水夫共は右方にゐる。スニツガスミアルマト前を這まうさして風む。ビル戸を以て二人を押へる。肘かけ椅子が三人を印度人の眼から隠してゐる。黒色の僧はま方をそるトツフに近づくと)

(ビルは後からまだ来る奴があるかを見る。それから一人で飛び出して——靴はもう脱いでしまつてゐる——僧を刺す)

(僧叫ばうとする、ビル左の手で僧の口を押へる)

(トツフは新聞を読み續けてゐて、後を見ようともしない)

ビル。(小聲で)トツフイ、たつた一人つきりだ。どうしよう?

トツフ。(首を動かさず)一人切りか?

ビル。さうだ。

トツフ。ちよつと待つてくれ。工夫して見る。

(まだ新聞に夢中になつた體である)

トツフ。うん、さうだ。ビル、元へ歸れ、もう一人のお客も引込まなくつちや。

仕度はいいか?

ビル。よし。

トツフ。いゝかい。今度は俺がヨークシヤのお邸で崩御のところだ。お前が俺の代りにお客を引き受けるんだ。

(トツフは窓からよく見えるやうに飛び上がつて、両手を振りもがき、床に死んでゐる僧の側に倒れる)

トツフ。そらつ、用心しろ。(眼をつぶる)

(長い間がある。再び月がゆつくり極くゆつくり開く。又一人の僧が這ひ込んで来る。彼は額に三つの點をつけてゐる。あたりを見廻して、やがて彼の仲間の許に這つて来て其死體をひつくり返してその握りしめてゐる両手を開いて見る。それから、倒れてゐるトツフの方を見る。やがてトツフの方に這つて行く)

(ビルは僧の後に忍んで前のま同じく刺し殺す、左の手を僧の口にあてて)

ビル。(小聲で)トツファイ、たつた二人つきりだ。

トツフ。まだ一人居る。

ビル。どうしよう?

トツフ。(起きあがる)左様さな。

ビル。かうやるに限ると思ふが。

トツフ。馬鹿な。おんなじ手を二度やるもんぢやない。

ビル。なぜ?

トツフ。二度やりや、駄目さ。

ビル。どうする?

トツフ。考へついたぞ。アルバート、お前此部屋にはいつて來い。俺が先刻見せてやつたやうにするんだ。

アルバート。承知だ。

トツフ。此處んところまで驅けて來てこの窓のところで此方の二人の奴と戦ふんだ。

アルバート。だが、そいつらは——

トツフ。さうさ、こいつらは死んでるとも、分かり好いアルバート、併し俺とビルとで二人を生き返らせる——さあ來た。

(ビルは一人の死體を兩腕に抱へる)

トツフ。さうだ、ビル。(ビルと同じく自分も死體を抱く) スニツガース出て来て手傳つてくれ(スニツガース出て来る) しゃがんで、しゃがんで、スニツガース。奴等の腕を振り廻してくれ。自分の身體を見せちやいけない。そら、アルバート、倒れる。アルバートが死んだんだ。ビル、ひつこめ、スニツガースも引つ込め、アルバートちいつとしてゐる。やつて来たたら動くんぢやないぞ。筋肉一つ動かすんぢやない。

(窓に人の顔が現はれて暫らく其處に動かすにゐる。やがて戸が開いて、するさうに見廻しながら第三の僧が遣入つて来る。自分の仲間の僧等の死體を見てそれをひつくり返して見る。何事か疑つてゐるらしい。彼は落ちてゐるナイフを一つ取り上げて両手に一つづつ、ナイフを持ち、壁を背負つて立つ、左右を見る)

トツフ。ビル、出て来い。

(僧は戸口に走る。トツフ第三の僧を後から刺す)

トツフ。諸君、好い一日の仕事だつたなあ

ビル。トツフイ、うまうやつたなあ。お前は智者だねえ。

アルバート。智者といふのはお前のことだ。

スニツガース。もう、あとにゐやしめえな、ビル、ゐるだらうか？

トツフ。もう此世にや誰もゐない。

ビル。これでありつたけど。あの神殿おみやには三人切りつかゐなかつた。坊主が三人と、それからうすつ氣味のわりい神様の像だけだ。

アルバート。トツフイ、いつたいあれはどのくらゐの價值ねうちがあるんだい？ 千ポンドぐらゐもするかい？

トツフ。何處の店にも在りつたけの商品しなをまとめたつて、あれ一つと同じぐらゐの價值だ。つまり俺たちが吹っかけ次第の價值ねうちがある。

アルバート。すると、俺たちはもう金持になつたんだな。

トツフ。さうよ。それよりなほ好い事は、もう俺たちの後繼者あつちは一人もゐないん

だ。

ビル。直ぐ買った方がいしな。

アルバート。そりやさう容易しくは運ぶまい。最つと小さくつて五つ粒も六つ粒もあればよかつたのだが。あの像にはもう他に一つも着いてゐなかつたらうか？

ビル。ゐなかつた。あれはすつかり緑玉で出来てゐて、たつた一つ此眼玉がついてゐた。あの額の真ん中にこれをつけてゐて、世界中にあのくらゐ見つともねえ奴はないと思つたよ。

スニツガース。俺たちはみんなでトツファイに禮をいはなくつちやならない。

ビル。さうとも、ほんとに、さうだ。

アルバート。もし、トツファイがゐなかつたから――

ビル。さうだ、もしトツファイあにきがゐなかつたとしたら――

スニツガース。智者だなあ。

トツフ。なあに、なんだよ、俺はね、物事が前もつて分かる性分だね。

スニツガース。さうと見えるなあ。

ビル。ほんとさ。トツファイが前から知らない事が起つて来る氣づけえはないんだな。なあトツファイ？

トツフ。さうだな、そんな事は起りさうもないな。そんな事はまあ滅多にあるまい。

ビル。俺たちの生死もトツファイに會つちや骨牌の一手ぐらゐなものなんだ。

トツフ。さうさ、やつらの手を破つたわけだ。

スニツガース。(窓に行き)だれかに見られちやいけないが。

トツフ。誰も此方の方に来やしない。俺たちは此野原に一人ぼつちだ。

ビル。これを、何處へ持つてかう？

トッフ。穴倉に埋めちまへ、急ぐにや及ばないが。

ビル。それからどうするい、トツファイ？

トッフ。左様、ロンドンに行つてルビー事件の後始末をつけちまはう。俺たちは此事件を可成うまく片付けた積りだ。

ビル。先づ一番さきに大事のトツファイあにきに一つ御馳走をしなくつちやなるまい。この連中の葬式は今夜やることにして。

アルバート。さうだ、それがいい。

スニツガース。それに限る。

ビル。一同でトッフの健康を祝さう。

アルバート。ほんとにトッフは偉いなあ。

スニツガース。大將か總理大臣になつてもいい人間だ。

(彼等一同して棚より壺を取り下ろし、仕度する)

トッフ。とにかく俺たちも夕飯ゆふめしにありつけるぐらゐの働きはしたんだからな。

(一同腰掛ける)

ビル。(コップを持って) 萬事をうまく察し當ててくれたトツファイあにきの健康を祝す。

アルバートとスニツガース。トツファイあにきに。

ビル。我々の生命を救つてくれて財産まで拵へてくれたトツファイ君に。

アルバートとスニツガース。よう、よう。

トッフ。今夜俺の生命を二度救つてくれたビル君の健康を祝す。

ビル。お前の智慧がなけりや俺には何も出来なかつたんだ。

スニツガース。よう、よう。

アルバート。トッフには何でも前から分かるんだ。

ビル。トツファイ、演説をやれ、俺たちの大將の演説だ。

一同。さう。さう。演説だ。

スニツガース。演説だ。

トッフ。それぢや、水をすこしくれ、此ウイスキーは俺の頭には強すぎる。大事のお客人をあな倉に無事に納めてしまふまでは俺の頭も冷靜にして置く必要がある。

ビル。水を、承知だ。スニツガース、水を持つて来てやれ。

スニツガース。此處ぢや水を使はないからな。何處へ行つたら、あるだらう？

(スニツガース出て出て行く)

アルバート。我々の運を祝さう。

ビル。アルバート・トーマス君の健康を祝す。

アルバート。今度はウイリアム・ジョーンズ君だ。

(スニツガース何物かに怪した様子で再び入場)

トッフ。ようつ。仲裁役ジェトロブ・スミス君またの名スニツガース君のお歸りだ。

スニツガース。トツファイ、俺はあのルビイの分け前のことを考へて見たが、俺は入らない。

トッフ。なんだい、スニツガース、何をいつてるんだ。

スニツガース。トツファイ、お前がみんな取れ、みんなお前のにしていゝ、たゞスニツガースは此ルビイに關係がないといつてくれ。さういつてくれ、トツファイ、さういつてくれ。

ビル。スニツガース、お前、訴へようといふのか？

スニツガース。なんの。俺はたゞルビイが欲しくなくなつたんだ、トツファイ——トッフ。スニツガース、つまらないことは云はないこつた。俺たちはみんな此事

件に係り合つてる。一人が絞罪なら、みんな絞罪だ、併し、さうめつたに往生はしない積りだ。それに、絞罪とはいはせまい。先方でもナイフを持つてゐたんだから。

スニツガース。トツファイ、トツファイ、俺は何時でもお前を大事にした、俺は何時でも、トツファイにも働かせて見ろといつてゐた。トツファイ、どうか俺の割前だけ抜かしてくれ。

トツフ。どうしたといふんだ？ どうしようといふんだ？

スニツガース。トツファイ、どうか抜かしてくれ。

トツフ。返事をしろ。どうしようといふんだ？

スニツガース。俺は最う割前が欲しくなくなつた。

ピル。お前巡査にでも會つたのか？

(アルバート、ナイフを抜く)

トツフ。アルバート、ナイフは無用だ。

アルバート。おや、どうする？

トツフ。行く處に行つて眞實ほんどの事をいふさ、ルビイだけ隠しといて。俺たちは先方から手向つて來られたんだもの。

スニツガース。巡査なんぞ來やしない。

トツフ。それおや、どうしたんだ？

ピル。いつてしまへ。

スニツガース。俺は神様にかけて――

アルバート。ふん。

トツフ。邪魔を入れるな。

スニツガース。俺は確かに、見たくないものを見た。

トツフ。見たくないものを？

スニツガース。(泣き出す) あゝ、トツファイ、トツファイ、どうか抜かしてくれ。俺の割前をお前取つてくれ。取るといつてくれ。トツフ。何を見たらう？

(スニツガースのすゝり泣の聲のほか音もせず、しいんさしてゐる。その時、石のやうな足音が聞える)

(恐ろしい顔の神の像入り来る。盲目で手探りで入り来る、手探りでセビイの處まで来てルビイを取り上げ、自分の額の孔に押し込む)

(スニツガースなほも靜かに泣いてゐる。餘の一同は恐怖して見詰めてゐる。神の像は今度はもう手探りではなく、歩いて出て行く。その足音が遠ざかつて、ひよいと止まる)

トツフ。あゝつ、大變!

アルバート。(子供のやうな泣きさうな聲で) トツファイ、なんだ?

ビル。アルバート、あの(小聲で)うす汚ない神様が印度から來やがつた。アルバート。もう行つてしまつた。

ビル。眼玉を取つて行つた。

スニツガース。俺たちは助かつた。

(遠く離れた邊から聲が聞える、外國人らしい調子をつけて)

聲。船員ウイリアム・ジョーンス。

(トツフは一言も口をきかず、身動もしない。たゞ恐怖に馬鹿のやうになつて凝視する)

ビル。アルバート、アルバート、なんだらう?

(ビルは立ち上がり室外に歩み出る。一聲のうめき聲聞える。スニツガース處に行く。彼は病人のやうにうしろに倒れかゝる)

アルバート。(小聲で) 何事だらう?

スニツガース。見た、俺は見た。あゝ俺は見ちやつた。

(スニツガース、テーブルの傍に戻る)

トツフ。(スニツガースの腕にそうつと自分の手を載せて、おだやかに機械を取る調子で) スニツガイ

ス、何があつたのだ？

スニツガース。俺は見ちまつた。

アルバート。何を？

スニツガース。あゝ！

聲、船員よせのりアルバート・トーマス。

アルバート。トツファイ、行かなくつちやなるまいか？ 俺も行かなくつちやなる

まいか、トツファイ？

スニツガース。(アルバートにしがみついて) 動いちやいけねえ。

アルバート。(行きながら) トツファイ、トツファイ。

(アルバート出て行く)

聲、船員よせのりジエーコブ・スミス。

スニツガース。トツファイ、俺にや行かれない。行かれない。とても行かれない。

(スニツガース出て行く)

聲、船員前もと士族アーノルド・エヴェレット・スコット・フォルテスク。

トツフ。こんな事とは知らなかつた。

(トツフ出て行く)

(幕)

註——トツマはスラングにて紳士とか氣どりやさかいふ意味の語、スニツガースはくすくす笑ひこいふやうな意味の語。

女王の敵

女王の敵 (二幕)

人

女王

アカザアブセス (女王の侍女)

ラダマンダスベス公

ゾフェルネス公

ホーラスの祭司

四つの國の王

エチオピアの双子の公爵

デアニ

サアラバス 女王の奴隸

ハアライ

奴隸等數人

處

埃及の地下の神殿

時

六代目の王朝

舞臺二つに分れてゐる。右手——月口に降り行く階段がある。左手——其月の内部の地下の神殿

——舞臺の双方とも暗やみの中に暮あく——

二人の奴隸が蠟燭を持って階段に現れる。二人は階段を降りながら壁にれち込みの燭にその蠟の火をつける。やがて神殿まで来て其處の燭にも火をつけて凡ての燭の火がともされる。神殿の中には酒宴の

支度をした食卓があり、壁の中ほどに酒膳所か見える格子がある。

二人の奴隸はタアニとサアラバスと呼ばれてゐる

サアラバス。タアニ、まだよつほど遠いのか？

タアニ。そんなにはないよ、サアラバス。

サアラバス。濕つぽい恐ろしい所だな。

タアニ。もうそんなに遠くはない。

サアラバス。女王はなぜ斯んな恐ろしい所で宴會をなさるんだらう？

タアニ。なぜだか俺は知らない。女王は敵の人たちと宴會をなさるんだ。

サアラバス。俺が捕へられた故郷の國では俺たちは敵と宴會をすることはなかつた。

タアニ。さうか？ 女王は敵と宴會をなさるのだ。

サアラバス。なぜだらう？ なぜだかお前知つてるか？

タアニ。それは女王のなさることだ。(沈黙)

サアラバス。タアニ、入口だ、入口のところで来てしまった。

タアニ。うん、これが神殿だ。

サアラバス。實際いやなところだな。

タアニ。宴會の支度は出来てゐる。俺たちがあかりをつければ、それでおしまひだ。

サアラバス。此神殿は何を祭つてあるのだ？

タアニ。むかしナイルを祭つたとも人が云つてゐる。今は何を祭つてあるのか俺は知らない。

サアラバス。それぢやナイルはもう此神殿にはゐないのか？

タアニ。もう此神殿ではナイルを拜むことはしないといふはなしだ

サアラバス。もし此おれがナイルであつたにしろ、俺だつてあの(上の方を指さす)お

天道様の日光(あかり)の中にゐたいと思ふからな。(サアラバス不意にハアリーの不恰好な姿を見

出す)お、お、お。

ハアリー。ううつ！

タアニ。なんだ、ハアリーか。

サアラバス。俺はまた恐ろしい悪い神かと思つた。

(ハアリー笑ふ。彼は自分の大きな鐵の檻に身を倚せて立つてゐる)

タアニ。彼奴は此處で女王を待つてゐるのだ。

サアラバス。女王はハアリーにどういふ不氣味な御用があるのか？

タアニ。俺は知らぬ。ハアリー、女王を待つてゐるのか？(ハアリーうなづく)

サアラバス。俺はこんな處の宴會はまつびらだ。女王と一緒にだつてまつびらだ。(ハアリー長く笑つてゐる)

サアラバス。俺たちの仕事は濟んだ。さあ、斯んなところは出て行かう。

(サアラパスミタアニ階段を昇つて去る)

三二六

(女王は侍女アカザアブセスを従へて階段に現れる。侍女は女王の髪を捧げてゐる。二人は神殿に入る)

女王。 あゝ、すつかり支度が出来てゐる。

アカザアブセス。 いえ、いえ、女王様、何のお支度も出来てはをりません。 おめし物も——(肩の邊を)此邊で止めなければなりませんし、それから、おぐしに飾をつけませんければ。

(侍女、女王の身を飾り始める)

女王。 アカザアブセス、アカザアブセス、わたしは敵といふものを持ちたくな

す。 アカザアブセス。ほんに、女王様、あなたの御身に敵があるといふのが違つてをります。 こんなにお優しい、こんなにお繊美<sup>きよしみ</sup>な、こんなにお美しいお方に一人の

敵もある筈はございません。

女王。 もし神々様におわかりになれば、斯ういふ事を許してお置きになる筈はな

す。 アカザアブセス。 わたくしは神々様に濃い葡萄酒を注いでさし上げました、あぶらみの肉も差上げました。ほんにわたくしはおいしい物を度々さし上げました。女王様の敵がなくなりますやうに、女王様はあんまりお繊美<sup>きよしみ</sup>で、あんまりお美しういらせられますからと私はお祈りいたしました。それでも神々様はおわかりがございません。

女王。 もし神々様にわたしの涙が御覽になれたら、小さい一人の女の身にこれほどの苦勞をおしよはせになるまいものを。神々様は男ばつかし見ていらつしやる。そして男たちの恐ろしい戦争ばかり見えていらつしやる。どうして男たちはお互に殺し合つたり恐ろしい戦争をしたりしなければならぬのか？

アカザアブセス。女王様、わたくしは神々様よりはあなたの敵の方が悪いと存じます。あの人たちの悪い機嫌にも直ぐにお心をお痛めあそばす斯んなにお美しいあなた様をなぜ彼の人たちはお苦しめ申すのでございませう？ あの人たちからあなたがお取りなさいましたのはほんの小さい領地でございましたのに。小さな領地ぐらゐ失くします方が無骨で不親切でをりますよりはどんなにか増しでございませうのに。

女王。領地のことなんぞ云はないでおくれ。わたしはそんな事はなんにも知らない。わたしの大將たちがその領地も取つたとかいふことだけれど。それはわたしの知つたことか？ あゝ、どうしてあの人たちは此わたしの敵になるのだらう？

アカザアブセス。女王様、あなたは今晚ほど美しいことはございませぬ。

女王。今晚はわたしも美しく見えなければならぬ。

アカザアブセス。ほんにお美しうございます。

女王。アカザアブセス、もう少し香水を。

アカザアブセス。おぐし飾りをも少し平に結びませう。

女王。なんの、あの人たちはそんな物を見もしまし。それが黄色だか淺黄だか見もしまい、あの人たちが見なかつたら、わたしは泣くだらう、こんなに美しい飾りなのに。

アカザアブセス。お氣をお鎮めあそばせ女王様！ もう直きにあの人たちがまゐりませうのに。

女王。ほんとに、あの人たちはもうわたしの身ぢかに來たに違ひない、わたしの身體が顫へてゐる。

アカザアブセス。お顫へになつてはいけません、女王様、お顫へになつてはいけません。

女王。それでもあの人たちは恐ろしい男たちだもの、アカザアブセス。

アカザアブセス。それでも、お願へになつてはなりませんね、おめしものの具合も今ちやうどよろしいところでございます。もしお願へあそばすと！ まあ、どんな恰好になりますでございませう？

女王。あの人たちはあんな大きな怖ろしい男たちだもの。

アカザアブセス。あ、おめしものが、おめしものが、いけません、いけません！

女王。あゝわたしには堪へられない。堪へられない。あの大きな荒武者のラダマングスベスもゐる、ホーラスの怖い祭司もゐる、それから——それから——あゝわたしには會へない、とても會へない。

アカザアブセス。女王様、あなたが御自分でお招きになりましたのでございませう。

女王。わたしが病氣だと云つておくれ、熱が高いといつておくれ。さ、早く、早く、わたしが何か急性の熱病に罹つて、とてもあの人たちに會へないと云つて

おくれ。

アカザアブセス。女王様——

女王。早くと云つたら、わたしにはとても我慢が出来ない。(アカザアブセス出て行く)

アカザアブセス。(再び入り来る) 女王様、みんなもうまわりましてございます。

女王。あゝどうしよう？——此かざりをもつと頭あたまの上に高くつけておくれ、見えるやうに(アカザアブセス其通りにする)この綺麗な飾りを。

(女王は手に持った小さい鏡を見てゐる。奴隷一人階段を降りて来る。續いてラダマングスベスミゾフェルネス降り来る。ラダマングスベスミゾフェルネス立ち止まる、奴隷はすつと下の方で立ち止まる)

ゾフェルネス。ラダマングスベス、最後にもう一度考へて貰ひたい。まだ今からでも我々は引き返せる。

ラダマングスベス。女王は外には一人の兵士も置いてなし、又隠してあるらしい

所も見えない。たゞ空しい平野とナイルの河ばかりです。

ゾフェルネス。併し此暗い神殿みやの中に何か隠してあるかも知れぬ。

ラダマンガスベス。神殿は小さく階段も狭い、味方の人も直ぐ後から来られる。

我々の剣さへあれば、女王の凡ての兵を此階段で拒ぐことが出来ます。

ゾフェルネス。なるほど。狭い階段だ、併し——ラダマンガスベス、わしは

人間も神もさては女も怖いとは思はぬが、——我々を宴會に招待する此女

の手紙を見た時、わしはどうも行つてはならないやうな感じがした。

ラダマンガスベス。女王は我々が敵であつても愛したいと云はれました。

ゾフェルネス。敵を愛するといふことは自然ではない。

ラダマンガスベス。女王は一時の出来心で動かされる人です、春風が花を動かす

やうに——あちらこちらに女王の心が動かされる。今度のことも其出来心の

一つでせう。

ゾフェルネス。わしは女王の出来心なんぞ信用せぬ。

ラダマンガスベス。世間ではあなたのことを善い忠告を興へる人即ちゾフェルネスと呼んでゐる。それ故、わたくしもあなたの忠告に従つて引き返すことにします、實は降りて行つて此可愛らしい氣儘な姫君と食事をしたいのであるが、

(二人引き返して階段を上がる)

ゾフェルネス。ラダマンガスベス、引き返すのは慥かに上策だ。もし此階段を下りて行つたら恐らく我々は再び蒼空を見ることも出来まい。

ラダマンガスベス。まあ、まあ、何にしても、引き返させう。私は女王の心を悦ばせてやりたいと思つたが、併し御覽なさい、ほかの連中がやつて来る。もう歸れなくなつた。ホーラスの祭司が来る。かうなつては我々も宴會に行かざばなりませんまい。

ゾフェルネス。仕方がない。

(彼等再び降りて行く)

ラダマンガスベス。用心させう。もし女王が彼處に人數を備へてゐるやうだつたら、直ぐ引き返すことにしませう。

ゾフェルネス。それがよろしい。

(奴隷戸を開く)

奴隷。ラダマンガスベス公。ゾフェルネス公、お入り。

女王。ようこそ。

ラダマンガスベス。御機嫌よろしう。

女王。まつ！ 劍をお持ちあそばしましたの？

ラダマンガスベス。劍を持つて來ました。

女王。まあ、それでも、あなたの大きな劍は恐ろしいではございませんか。

ゾフェルネス。我々は何時も劍を持つてをります。

女王。それでも、劍は御不用でございます。もしわたくしを殺しにおいてなされましたのなら、その大きなお手だけで御十分でございます。なぜ劍をお持ちになりましたの？

ラダマンガスベス。陛下、我々はあなたを殺しにまゐつたものではありません。

女王。ハアライ、お前の持場においで。

ゾフェルネス。此ハアライと云ふのは何者で、その持場といふのは何ですか？

アカザアブセス。女王様、お顔へあそばすな。おふるへあそばしてはなりません。

ぬ。

女王。あれは漁師でございます、ナイルの河に住んで、魚を漁る人でございます。ほんとにあれは何でもございませぬ。

ゾフェルネス。奴隷、その大きな鐵の門は何か？

(ハアライ大きく口を開けて舌がないのを見せる。ハアライ退場)

ラダマンダスベス やつ！ 彼奴の舌は焼き切られてゐる。  
ゾフェルネス。秘密の使に行くやつだらう。

(第二の奴隷入場する)

第二の奴隷。ホーラスの祭司様お入り。

女王。ようこそ、神々様の聖いお友だち。

ホーラスの祭司。御機嫌よろしう。

第三の奴隷。四つの國の王様お入り。

(女王と王と挨拶する)

第四の奴隷。エチオピアの御兄弟の公爵様お入り。

四つの國の王。我々一同集まりましたな。

祭司。女王の大將等と戦争した我々一同が。

女王。わたくしの大將たちのことをおつしやつて下さいますな。恐ろしい男たち

のことを聞きたくはございません。皆さま方は私の敵でいらつしやいました  
が、わたくしは敵を持ちたくございません。それで皆様を此宴會にお招きいた  
しました。

祭司。そして我々もまゐりました。

女王。そんなに恐ろしいお顔でわたくしの方を御覽あそばすな。わたくしは敵を  
持ちたくございません。敵があると思ふと、わたくしは眠ることも出来ませ  
ん。さうではないかい、アカザアブセス？

アカザアブセス。ほんに女王様はずるぶん御苦勞あそばしました。

女王。あゝアカザアブセス、なぜわたしには敵があるのだらう？

アカザアブセス。女王様、今晚からよくお眠りになれませう。

女王。ほんに、さうだ、わたしたちはみんなお友達になるのだもの、さうではご  
さいませんか、お客様がた？ さあ、どうぞお掛けあそばして。

ラダマングスベス。(ゾフェルネスに) ほかに出入口もないやうです。大丈夫でせう。  
ゾフェルネス。いや、ほかにはないやうだ。しかし、あの眞暗な大きな穴は何だ  
らう?

ラダマングスベス。彼處からは一度に一人しか出て來られません。人間が來よう  
が獸が來ようが大丈夫です。我々の劍があるあひだは彼處から何も出ては來ま  
すまい。

女王。どうぞお掛けあそばして。

(彼等一同用心ぶかく腰かける、女王は立つて一同を見てゐる)

ゾフェルネス。給仕人がゐない。

女王。ゾフェルネス様、あなたのお前に召上り物はございます、それとも、果物  
があんまり少しばかりなので、おとがめでございますか?  
ゾフェルネス。答めはしませぬ。

女王。きついお眼つきでわたくしをお答めのやうに見えます。

ゾフェルネス。答めはしませぬ。

女王。敵のお方々、どうぞわたくしに御親切になすつて下さいまし。ほんとに此  
處には給仕人はをりません。それは此わたくしの身に就いてどんな悪い事を皆  
様がお考へかわたくしは存じてをりますから——

エチオピアの公爵。いや陛下、我々はあなたのことを悪くは思つてをりません。

女王。いえ、それでもあなた方は恐ろしい事をお考へになつていらつしやいます。  
ホーラスの祭司。陛下、我々はあなたのことを何も悪くは思つてをりませぬ。

女王。わたくしは斯う云ふことを恐れてをりました、もし私が給仕人を置きま  
したら、あなた方はかうもお考へになりませう——我々の敵の悪もの、女王  
は、我々が食事してゐる間に彼等に襲はせる積りだらうと——

(エチオピアの第一の公爵背後に立つてゐる自分の奴隷にそつと食物を渡す、奴隷味つて見る)

女王。わたくしが血を見ることがどれほど嫌ひか、あなた方は御存じでございますまいが、わたくしは決して決してそんな事を申し付けようとは思ひませぬ。血を見ることは恐ろしいでございます。

ホーラスの祭司。陛下、我々はあなたを信じてゐます。

(祭司も公爵と同じく奴隷に食物を渡す)

女王。この神殿の周圍數哩と遠くナイルの河に沿うて一人の人間もゐてはならぬと申付けました。わたくしはさう命令いたしました。そして一人の人間もをりませぬ。それでも皆様はわたくしをお信じ下さいませぬか？

(ゾフェルネス同じく奴隷に渡す、他の一同も各自に同じ事をする)

ホーラスの祭司。まつたく、我々はあなたを信じてゐます。

女王。そしてあなたは、わたくしを怖がらせる怖いお眼のゾフェルネス様、あなたはわたくしをお信じ下さいませぬか？

ゾフェルネス。陛下、敵の領土にある時は十分の備をいたすのが戦術の一つであります。我々は随分久しくあなたの大将たちと戦争してゐましたから、ついにまだに其術を忘れ切られないのかも知れませぬ。決してあなたを信じないわけではありません。

女王。わたくしは此侍女とたつた二人ざりてゐますのに、どなたも信じては下さらない！あゝアカザアブセス、わたしは怖い。もしや敵の人たちがわたしを殺して運び出して、寂しいナイルにわたしの身體を投げ込みはしまいか？

アカザアブセス。いえ、いえ、女王様、あのお方たちはあなたを害しはなさりませぬ。あのお方たちの恐ろしいお眼つきがどれほどあなたを悩ませるか、あの方たちは御存じないのでございます。あなたがどれほどお優しいお心か、あのお方たちは御存じないのでございます。

ホーラス祭司。(アカザアブセスに)まつたく我々は女王を信じてゐます、女王を害

さうとする者は一人もいません。(アカザアブセス女王をなだめる)

ラダマンダスベス。(ゾフェルネスに) 女王がたつた一人であられるのに、それを疑ては濟まないと思ふ。

ゾフェルネス。(ラダマンダスベスに) 併し私は早く此宴會が終ればよいと思ふ。

女王。(一同に聞えるやうに、アカザアブセスとホーラスの祭司に云ふ) それでもあの方たちは私が出した物を食べて下さらない。

エチオピアの公爵。我がエチオピアでは女王がたと食事いたす時には、直ぐには頂戴しません。女王があがるまで待つてをるのが禮であります。

女王。(食ふ) 御覽あそばせ、わたくしはいただきます。

(女王はホーラスの祭司の方を見る)

ホーラスの祭司。我々祭司の職に在る者は、まだ月の神の御子たちが此地上に住まはれた神代のむかしから、神々にきよめの祈りをいたして食物を和らげた後

でなければ、食事いたさぬのが習慣ならはしとなつてをります。(祭司は食物の上で手を動かして見せる)

女王。四つの國の王様もめしあがらぬ。そしてあなたは、ラダマンダスベス様。

女王の酒を奴隸におやりなさいました。

ラダマンダスベス。陛下、わたくしの家の掟として———ずつと昔から左様でありましたさうで———世の諺にもある如く———位貴きものは卑しき者の腹滿つるまで食はざるの掟であります、我々の身體も卑しき者の身體と同じものであることを忘れぬ爲に———

女王。どうしてそんなにあなたの奴隸を御らんになります、ラダマンダスベス様?

ラダマンダスベス。わたくしが自分の家の掟の如く行つたといふことを自分自身に聞かせてをるところです。

女王。あゝ情ない、アカザアブセス、あの方たちは私と食事をして下さらない、そしてわたしが一人ぼつちのかよわい者だと思つて馬鹿にしておいでなさる、あゝ今夜わたしは眠れない、眠れない。(女王泣く)

アカザアブセス。まあ、まあ、女王様、あなたはきつとお眠りになれます。御辛抱あそばせ、無事にすみまして、きつとあなたはお眠りになれます。ラダマングスベス。いや陛下、我々は今いたただかうとしてをります。

エチオピヤ公爵。まつたく我々はあなたを馬鹿にしてゐる譯ではありません。四つの國の王。陛下、我々はあなたを馬鹿にしてはをりません。

ホーラスの祭司。一同は決してあなたを馬鹿にする氣ではありません。

女王。あの方たちは——わたくしの御馳走を奴隸たちにやつてゐる。

ホーラスの祭司。あれは間違ひでした。

女王。間違ひではありません。

ホーラスの祭司。奴隸たちは腹が減つてゐましたので。

女王。(まだ泣きながら) あの人たちはわたしが毒殺すると思つてゐる。

ホーラスの祭司。いや、いや、陛下、彼等もそんなことは思つてをりません。

女王。わたしが毒殺すると思つてゐる。

アカザアブセス。(女王をなだめる) まあ、お静かに、お静かに、あの方たちもそれほど残酷なおこゝろではございません。

ホーラスの祭司。彼等はあなたが自分等を毒殺なさるだらうとは思つてをりません。併しもしや此肉が毒ある矢で殺された獣の肉でないか、此果物が偶然にも毒蛇の咬んだ果物でないか、彼等にもそれは分かりません。かういふことはあつて事かも知れません。併し、彼等はあなたが自分等を毒殺なさらうとは思つてをりません。

女王。わたしが毒殺するとあの人たちは思つてゐる。

ラダマンドラスベス。いや陛下、御覧ください、我々は頂戴します。

(彼等忙しく奴隷たちと囁き合ふ)

エチオピアの第一の公爵。陛下、私はあなたの御馳走を頂戴します。  
第二の公爵。私は葡萄酒を頂戴します。

四つの國の王。私は此見事な柘榴とエジプトの葡萄を頂戴します。

ゾフェルネス。頂戴します。

(彼等一同食ふ)

ホーラスの祭司。(愛想よく微笑しながら)陛下、私はあなたの結構な御馳走を頂戴します。

(祭司は絶えず他の人々の様子を見ながら、ゆつくりと果物の皮をむく。そのうちに女王の息が次第に静まり、彼女の涙が乾く)

アカザアブセス。(女王の耳もとで)みなさんが上がつておいでになります。

(女王首を上げて一同を見守る)

女王。もしや葡萄酒に毒が這入つてはをりませんか？

ホーラスの祭司。いや、どういたして。

女王。もしやその葡萄が毒矢で刺されてはをりませんか？

ホーラスの祭司。いや、決して——決して——

(女王は祭司の杯より飲む)

女王。此葡萄酒を上がつて下さいませんか？

ホーラスの祭司。我々の將來の友誼を祝します。

(祭司飲む)

エチオピアの公爵。我々の將來の友誼！

ホーラスの祭司。今までと雖もほんたうの敵意があつたわけではありません。我々は女王の兵を誤解してゐたのです。

ラダマンダスベス。(ゾフェルネスに)我々は女王を誤解してゐました。葡萄酒に毒が這入つてはゐない。女王の爲に祝杯を擧げませう。

ゾフェルネス。それがよろしい。  
ラダマンダスベス。陛下、あなたの御健康を祝します。

女王。アカザアブセス、壇を——

(アカザアブセス細口の壇を持つて来る。女王は其中より酒を自分の杯に注ぐ)

女王。お客様がた、みな様のお杯に此壇からお注ぎ下さいまし。(女王飲む)  
ラダマンダスベス。陛下、我々は御無禮しました。結構な御酒です。

女王。これは古い酒で、ミテレネから南の國を見晴らすレスボンの地で出来たものでございます。聖埃及國の人々の心を悦ばせる爲に、船は海を越えナイルを遡つて此酒を載せて來ました。しかし此酒もわたくしには何のよろこびも與へてはくれません。

エチオピアの公爵。陛下、これは愉快な酒であります。

女王。わたくしは毒をあげる者と思はれてゐました。

ホーラスの祭司。陛下、まつたく誰もそんな事を考へはいたしませんでした。

女王。皆さんがさう思つておいでよした。

ラダマンダスベス。陛下、おゆるしを願ひます。

四つの國の王。お恕しを願ひます。

エチオピアの公爵。まつたく我々は思ひ違ひしてゐました。

ゾフェルネス。(立ち上がる)我々はあなたの果物を頂きあなたの酒も飲みました、そしてあなたのお恕しを得ました。今、平和の中においとまいたしませう。

女王。いゝえ、いゝえ、いけません。いけません！お歸りになつてはいけません！  
ん！お歸りになれば——まだあの方たちは私の敵だ——とわたくしは思ひます、そして今晚眠ることが出来ずまい。敵を持つことの嫌ひな此わたくし

しですもの。

三五〇

ゾフェルネス。我々一同平和の中にお別れいたします。  
女王。あゝそれではわたくしと一緒に何も召上がつては下さいませんか？

ゾフェルネス。我々はもう頂戴しました。

ラダマンガスベス。いや、いや、ゾフェルネス、あなたには見えなにか、女王は  
氣にかけてをられる。

(ゾフェルネス腰かける)

女王。ほんたうにもう少し長くわたくしと一緒に御食事なすつて下さいまし、そ  
して御愉快になすつて、もうわたくしの敵でなくなつて下さいまし。ラダマン  
ダスベス様、あのアツシリヤに向つた東の方に何とか云ふ國がございますね、  
ございましたね？ 何といふ名の國かわたくしは存じませんが——あなた  
のお家でわたくしの方から取り返さうとなすつていらつしやる——

ゾフェルネス。ふん！

ラダマンガスベス。(あきらめた調子で) あれはなくしました。

女王。その國の爲にあなたとお強い叔父様のゾフェルネス様がわたくし  
の敵におなりなさいました。

ラダマンガスベス。陛下、私共もあなたの軍隊と多少戦ひはしましたが、併しま  
つたくあれは戦術の練習のためなのです。

女王。わたくしは大將たちを呼び付けて、あの人たちの高い位置から追ひ下して  
叱つてやります、そしてアツシリヤに向いた東の方の國をあなたにお返しする  
やうに申し付けませう。たゞ、どうぞ此處に此宴會にお残りあそばしてあなた  
がわたくしの敵でいらしつたことを忘れて下さいまし——忘れて下さいまし

ラダマンガスベス。陛下、——あれは私の母の生れた國なのです。

三五一

女王。それでは、今晚此處へわたくしを一人置いてお歸りになりますな。

ラダマンダスベス。いや陛下、歸りはいたしません。

女王。(歸らうとして立ちかけた四つの國の王に) 島々で貿易いたします商人たちのこと

は、あの人たちから私の方でなくあなたのお手許に香料を差上げますやうにいたさせます。そして島の人たちもあなたのお國の神々様に山羊を捧げるやうに致させませう。

四つの國の王。寛大な陛下——どうもそれでは——

女王。どうぞ此宴會を捨ててつれなくお歸りになりますな。

四つの國の王。いや決して——(王酒を飲む)

女王。(愛想よく二人の公爵に對して) エチオピア全國をあなたの方のものになさいまし。

見も知らない獸類けだものの王國までも。

エチオピアの公爵。陛下——

第二の公爵。陛下、あなたの王位の御繁榮を祈つて此杯を頂きます。

女王。それではどうぞ御ゆつくりあそばして、私と一緒に何か上がつて下さいまし。乞食の幸福は敵がないといふことでございます。わたくしは自分の窓から長い長いあひだ襦袢に包まつて行くあの人たちを眺めて羨んでをりました。どうぞ皆様、ごゆつくりあそばして下さいまし。

ホーラスの祭司。陛下、寛大なる王者の御心は神々を悦ばせました。

女王。(祭司に向つて微笑する) ありがとう。

ホーラスの祭司。え、つ、その——埃及の凡ての人民からホーラスの神に捧げる捧げ物のことに就きまして——

女王。それはみんなあなたの物になさいまし。

ホーラスの祭司。陛下。

女王。わたくしはそんな物は少しも頂かないでよろしうございます。あなたの御

随意にお使ひあそばせ。

ホーラスの祭司。ホーラスの神も陛下の御心をいかに御満足におぼしめされませう。可愛らしいアカザアブセス、これほどお優れなされた御主人を持つたお前は幸福だの！

(祭司の腕はアカザアブセスの腰を抱く。アカザアブセス祭司を見て微笑する)

女王。(立上がる) みな様がた、未来のために祝杯をいたしませう。

ホーラスの祭司。(不意に驚いて) あつ！

女王。神々様の聖いお友だち、どうかなさいましたか？

ホーラスの祭司。いや、なんでもありません。時々わたくしに豫言の靈が來ます。極めて偶然にしか來ません。それが今來たやうでした。神々の一人がはつきりと私に口をきいたやうに思ひました。

女王。その神が何とおつしやいましたの？

ホーラスの祭司。神が此處のところ(右の耳を指す)それとも直ぐわたくしの後であつたか——未来の爲に祝杯をあげるな——と私に云はれたやうに感じたのです。併しなんでもなかつたのでせう。

女王。それではあなたは過去のためにお杯をお舉げ下さいますか？

ホーラスの祭司。いや陛下、我々は過去を忘れしました。あなたの結構な御酒が我々に過去と過去の争ひを忘れさせました。

アカザアブセス。それでは、現在の爲にお杯をおあげあそばせな？

ホーラスの祭司。現在の爲に！こんな美しい人の側に坐つてゐられる現在の爲に、私は現在に向つて杯を舉げる。

女王。(他の一同に)そして私どもは、未來と、そして忘れるために——私どもの敵を忘れる爲に——此杯をあげませう。

(一同飲む、みんな上機嫌になる、宴會が呼吸よくはこぶ)

女王。アカザアブセス、みんな上機嫌だね。

アカザアブセス。上機嫌でございます。

女王。エチオピアの話をしてゐる。

エチオピアの第一の公爵。——冬が来ると矮人が直ぐに戦争の支度をする、先づ戦争の場處を撰ぶと其處で幾日も待つてゐる、だから鶴の群れがやつて来て見るともう敵はちやんと支度が出来てゐる。其處で鶴は先づ第一に自分たちの嘴で羽の繕ひをする、そして直ぐには戦はない、それから長い旅行の疲れをすつかり息めると今度は非常な勢で矮人たちを襲撃する、矮人達には大分死ぬのがある、併し矮人達は——

女王。(アカザアブセスの胸を取つて) アカザアブセス！おいで！

(女王立つ)

ゾフェルネス。陛下、何方へかおいでになりますか？

女王。ゾフェルネス様、一寸の間でございます。

ゾフェルネス。何の御用で？

女王。秘密な神にお祈りしにまゐります。

ゾフェルネス。何といふ名の神ですか？

女王。その神のお名も行爲も秘密なのでございます。

(女王戸口に行く。急に一同沈黙する、みんなが女王を見守る。女王はアカザアブセス出て行く。暫

時沈黙。やがて一同大きな剣を抜いてテーブルの上に各自の傍に置く)

ゾフェルネス。奴隷たち、入口へ行け。誰も入れてはならぬ。

エチオピア第一の公爵。女王は我々に危害を興へる氣ではないでせう。

(奴隷一人戸口から戻つて来てひれ伏して云ふ)

奴隷。戸は外から鎖されてをります。

ラダマンダスベス。そんなものは剣で容易く開けられる。

ゾフェルネス。入口さへ守つてゐれば何の恐るゝところはない。

(此間女王は階段を昇り切り、扇を以て壁を三度叩く。大きい格子が外の方にそして上方にゆつくりと動く)

ゾフェルネス。(二人の公爵に) 早く、あの大きい穴に、お二人とも剣を持つてお立ち下さい(二人の公爵穴の上に剣をかざす) 何が這入つて來やうと殺しておしまひなさい。

女王。(階段の上に跪き、両手を上に伸す) あゝ聖なるナイル! 昔ながらの埃及の河! 尊いナイル! わたしは小さい子供の時分、むらさきの草の花を摘みながら、あなたの側で遊びました。わたしは優しい埃及の草花をあなたに投げてあげました。ナイルよ、その小さい女王があなたを呼んでゐます。敵を持つことの嫌ひな小さい女王があなたを呼んでゐます。ナイルよ、聞いて下さい。世間ではほかの河のことを云ひます、わたしはそんな馬鹿者の云ふ事は耳に入れません。わ

たしにはたゞナイルがあるばかり。紫の草花を摘んだその小さい子が今あなたに祈ります。ナイルよ聞いて下さい。わたしは神様に捧げ物の支度をしました。人はほかの神々のことを云ひます、わたしには唯ナイルがあるばかりです。わたしはお酒の捧げ物を用意しました——仙女の住むミテレネから取つたレスビヤの酒を——その酒があなたの水と交じり合つて、おしまひにはあなたがその酒に酔はされてアビシニヤの山々から海までも歌を唄つて行くやうに。ナイルよ、聞いて下さい。わたしは果物を捧げようとしてゐます、地の上の凡ての甘い汁の果物を、それから獸類の肉も添へて。ナイルよ、聞いて下さい、けだものゝ肉ばかりではありません。わたしはあなたに數人の奴隸と公爵たちと一人の王とを捧げます。今までにこれほどの捧げものはなかつたでせう。ナイルよ、日の光から下りて來て下さい、あゝひかしながらの埃及の河! 捧げものゝ用意が出來ました。ナイルよ、聞いて下さい。

エチオピアの公爵。誰も来ないやうだ。

女王。(扇を以て再び壁を叩く) ハアライ、ハアライ、お客さんたちの方は水を入れとくれ。

(大きい穴からみどりの激流が流れ落ちる、床からはみどり色のうす紗が立ち換がり燭の火音を立てて消える。堂内に水が満ちる。水は月の下から階段に上はる、燭の火一つ一つ音がして消える。水は水平に達してちやうど女王の器の端に届いて其處に止まる。女王は猫のやうにすばやく水からその器を引きのける)

女王。あゝアカザアブセス、わたしの敵はみんな死んでしまつたかい？

アカザアブセス。女王様、ナイルがみんな持つて行つてしまひました。

女王。(熱い愛を以て) あの聖い河が！

アカザアブセス。女王様、今晚はおやすみになれますか？

女王。あゝ、わたしは好い氣持に眠れるだらう。

(幕)

この書は大正七年に出すつもりでぬましたところ、病氣のためのびのびになり、大正八年の秋漸く全部を譯し終りましたので、その頃慶應にいらしたカズンズ氏に序文をいたゞいて出すことにしました。然るにその年の十月から家内に病人やら取込やら引きつゞいて起りましたので、出版の計畫はそれつきり流れてしまひました。

今年の春漸くすこし時を得ましたので、あらためて野口米次郎氏にお願ひしてロード・ダンセニイに手紙を書いていたゞき、不完全ながらも私の日本譯出版をゆるしていたゞくやうお願ひしました。六月ロード・ダンセニイからお返事があり、快くおゆるし下さいましたので、大森の福永氏のお店から出していたゞくことにしました。

ロード・ダンセニイが才にまかせて一日か二三時間ぐらゐで書かれたこの愉快な戯曲を今の疲れ切つた私が譯すことは思ひもありませんが、これは今から三四年前まだ私が翻譯その他すべての事に深い興味と好奇心を持つてゐました時分の元氣にまかせて譯したものです。

ロード・ダンセニイの手紙には、自分の書いた戯曲は二十四篇ある、その内九篇をすでに世に出してゐると云つてなられます。あとの十三篇はいつ世に出るのでせうか、それさし、それよりも更に新しいものを先きに出版されるのでせうか、私どもには何も分かりませんが、この書以外のものが一日も早く

世に出るやうにさは、ダンセニイのものを愛讀する世界の人々と共に譯者のいのるまゝころでございます。  
この譯についていろいろ御心配いたさしました野口氏をはじめ、菊池見氏、大田黒元雄氏、村岡花子  
さんにお禮申します。

大正十年十月

大森に於て

譯者

大正十年十月 十一日印刷  
大正十年十一月十四日發行

定價 二圓八十錢

■ 不 許 複 製 ■

■ 禁 無 斷 興 行 團 ■

翻譯者 片山廣子

發行者 福永文之助  
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷者 村岡敏三  
東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷所 福音印刷株式會社  
東京市京橋區銀座四丁目一番地

發兌

東京市京橋區尾張町  
振替東京五五三  
電話銀座一五八七  
一六九九

警 醒 社 書 店

IT2B33

成瀬無極著  
近代獨逸文藝思潮

四六判約五百頁

近刊

シエクスピア マクベス 定價 壹圓五拾錢  
森 林太郎譯 送料 八錢

イブセン ノラ 定價 壹圓五拾錢  
森 林太郎譯 送料 拾貳錢

イブセン ヘダガブラ 定價 四拾錢  
千葉 掬香譯 送料 四錢

イブセン 建築師 定價 四拾錢  
千葉 掬香譯 送料 四錢

イブセン 蘇生の日 定價 四拾錢  
千葉 掬香譯 送料 六錢

ヘツベル マリア・マグダレナ 定價 六拾錢  
吹田 蘆風譯 送料 六錢

フランス タイス 定價 壹圓五拾錢  
水野 和一譯 送料 拾貳錢

フォガツアロ 聖者 目下品切  
小野村・吹田共譯

トルストイ 宗教小説集 定價 壹圓貳拾錢  
小西 増太郎譯 送料 八錢

終